



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「恥辱」的存在の形象について：民族的自己批評としての魯迅文学 その二
Author(s)	丸尾, 常喜
Citation	北海道大學文學部紀要, 26(2), 225-276
Issue Date	1978-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33423
Type	departmental bulletin paper
File Information	26(2)_P225-276.pdf



「恥辱」的存在の形象について

——民族的自己批評としての魯迅文学　その二——

丸
尾
常
喜

「恥辱」的存在の形象について

——民族的自己批評としての魯迅文学　その二——

丸　尾　常　喜

(一)

日本にあった若き魯迅が、医学から文学に転じる刻苦勉勵の道すじで突きあてた課題は、死に瀕する祖国中国を、それを蝕む新と旧二つの病いの治療によって、「人間の国」へ再生せしめんとすることであった。旧い病氣とは、アジアの中央に屹然たる古文化を誇りつつ、しだいに向上心を失い、永年安逸を貪ってきたがゆえに自らおちこんだ半身不随の衰弱であり、新しい病氣とは、西洋の衝擊によって旧夢から揺り起こされ、にわか立ち上がったヨーロッパ文化の皮毛の輸入に狂奔する志士たちがもたらした文明の躁病である。志士たちは民族の前途を誤る重大な過失を犯している、と魯迅は考えた。ヨーロッパの輝かしい物質文明の根柢に「人間」のあること、「人間を立てる」ことなしに列国に伍して天地の間に生存を企むことはできぬことへの無理解によって。かの地の文化がすでに十九世紀的

「恥辱」的存在の形象について

「物質万能」と「衆愚支配」を自ら克服して、「物質万能の否定」と「個人の尊重」に歩み出しつつあることへの無知によって。魯迅の処方方は、ヨーロッパ文化の真の「精神」（個性の尊重と、もともと人間的な生命力としての科学精神）を、中国の「固有の血脈」に輸血することである。輸血は、少数の目覚めた英雄に「精神界の戦士」が立ち上がった、積年の困苦に衰微・疲弊の一途をたどってきたとはいえ、まだ天稟を失っていない農民に「朴素の民」へ呼びかけ、その覚醒をうながすことによってなされるはずであった。魯迅が選びとった文学は、その「声」でなければならなかった。それだけではない。「新生」の中国は、ヨーロッパがいまに引きずる悪しき「獸性」（侵略主義）の否定者として、同じくかれらの侵略と自らの病氣とに苦悩する国々の人民と連帯し、世界に新しい「人間的秩序」をうちたてるべく貢献しなければならぬものであった。魯迅は、当時の文章に「排満」の語をいちども用いなかったが、このような展望をつくり上げたものにとつて、「排満」は自明のことであった。ただ、以上の展望につきまとうある暗い不安と恐怖があった。天才英雄が庸衆に排斥され、虐げられる影象がそれである。だがそれゆえに戦士は、倒れても倒れても立ち上がり理想を実現せねばやまぬ、強力な意志を具えた人格でなければならない。以上のことに魯迅自身がひそかに自分をこのような戦士に擬していたという一点を加えれば、大まかにであるが、留学期魯迅の民族認識（それは当然世界認識と表裏をなすものであるが）と自己意識について一つの見取図を示したことになるであろう。

「狂人日記」における魯迅の文学的出発は、上述の構想の一つの崩壊を前提としてなされた再出発であった。「辛亥革命」の成功とその「挫折」の過程は、魯迅の民族認識に深刻な変化をもたらした。「朴素の民」のイメージはなおその余影をとどめはしたが、もはや新しい構想をつくり上げる契機とはなり得ず、「歴史の整数」は「精神」なき「物質」にぬりこめられ、かつての英雄はコンマ以下として「歴史の帳尻」から切り捨てられた。のみならず、結婚

に代表されるがとき魯迅個人の恥辱の体験は、庸衆と区別される自己の基盤を根柢から掘りくずした。「吃人」とは、そのような自己をつつみこんだ民族認識の象徴である。あたかも第一次大戦からロシア革命へと動いていく世界的潮流は、「獸性」の自己超克としての「人間的進化」の歩みとして、魯迅と中国を照らし出さずにはおかなかった。「狂人日記」第十二節の末尾「いまわかった、ほんとうの人間にどうして顔向けできようか」は、「真実の人間」に対して「吃人」の側から発せられた「恥辱」(『羞恥』)の意識の表現である。「狂人日記」において、覚醒とは究極的に「恥辱」の自覚を意味した。そのあと終節にいう「こどもを救え……」は、この「恥辱」感をバネに、その回復をめざして発せられた叫びであり、とりもなおさず作者自身の決意、民族へのメッセージであった。やや整理を加えて要約すれば、以上のようなことが、前稿「出版における『恥辱』(『羞恥』)の契機について」(本誌二十五の二、一九七七年三月)で私が述べようとしたことである。ただ前稿で述べ忘れたこと、また改めて確認しておきたいことがいくつかあり、本稿はまずそこから述べていくことにしたい。

「狂人日記」第四節の冒頭は次のような記述ではじまっている。歴史書の行間一面に「吃人」の二字が書きこまれているのを発見したあとにつづく文章である。

「朝、おれはしばらく静かに腰かけていた。陳老五が食事を届けてきた。野菜が一碗、蒸し魚が一碗。この魚の目は、白くて硬い。口をパツクリ空けた格好は、あの人を食いたい連中と同じだ。二、三口食ってみたが、ぬるぬるして魚だか人だか区別がつかない。それで胃液ごとゲーッと吐き出してしまった」

「吃人」の発見によって狂人が襲われた感情は、まずこのような「嘔吐」であった。このような「嘔吐」は、〈幻灯事件〉に類する事柄に遭遇するたびに、しばしば魯迅に起こったことであろう。だが自分の「兄弟」(日記では兄)

『恥辱』的存在の形象について

が「吃人」の一味であることを知る（同節末尾）におよんで事情は重大な変化をする。それは一つの本能的な牽引によって結びつけられた別の感情の出現である。「おれは人を食う人間の弟なのだ！ おれ自身は人に食われてしまつても、やはり人を食う人間の弟なんだ！」「恥辱」（『羞恥』）は「吃人」を、この「兄弟」としての自然関係の上に立つて、狂人自身の連帯責任として引き受けようとするところから起こつた感情である。「この人を食う人間は、人を食わない人間に對して、どんなに恥ずかしいことか」という兄に對する説得の論理は、このような「兄弟」としての恥意識にもとづいている。（以上のような意味で、「恥辱」の前段階としての「嘔吐」という層を脱落した前稿の分析は、不十分な理解のそしりを免れなかつたであろう）。だが「狂人日記」の展開は、さらに一步すすめて、最後には「四千年の食人の履歴を持つおれ」の発見にいたり、この恥辱感をほかならぬ「自己」（とその兄弟）の「恥辱」とする。つまり、「狂人日記」における狂人の「吃人」に對する感情は、正体不明の「恐怖」から出發して、「嘔吐」——「兄弟」としての「恥辱」——「自己」の「恥辱」という三層をなして深められ、つよめられたのである。この三層構造を見ておくことは、
「狂人日記」から「阿Q正伝」にいたる時期の魯迅の文章を理解するのに有効であらう、と私は思う。よく引用されるものであるが、「隨感錄六十六」「生命の路」（一九一九年）を見てみよう。

「生命は死を怕れない。死の面前を笑いながら、跳びはねながら、滅亡する人々を跨いで前進する。

何が路か。それは路のないところを踏んでつくつたものだ。荆棘^{いばら}だらけの土地を開いてつくつたものだ。

以前から路があつた。これからずっと路はあるだろう。

人類は決して寂寞ではないだろう。生命は進歩するものであり、楽天的なものなのだから。

昨日、私は私の友人に言った。『一人の人間が死ぬことは、死者自身とその親族にとつていたましいことである

が、一村、一町の人から見れば何ほどのことでもない。たとえ一省、一國、一民族が滅亡するとしても……』

しは不愉快氣に言った。『それは *factum* (自然) の場合だ。人々の場合ではない。君は注意する必要があるね』

私は考えた。かれの話ももっともだと⁽¹⁾

「一人の人間が死ぬことは……」という「私」の語は、「嘔吐」の契機である離反・反撥でさえない冷めた「悲觀」、「絶望」をはらんでいる。それが「私」の分身であるし、その語が示す本能的な連帶・牽引によって引きよせられ、深い「悲憤」の火花を発している。この本能的連帶・牽引こそ「羞恥」ないし「恥辱」を発生せしめる契機なのである。

前稿で述べたごとく、「恥辱」(「羞恥」) はあるものからの乖離の意識である。それは人間としての正と負、肯定的なものと否定的なものを見定めるリアルな認識と自己の運命にかける人間の熱情とが交流する反省的な情念である(この点が「屈辱」と異なる最大の要素である)。ただ、一人の人物が何と連帶し、何を正とし何を負とするかは、人それぞれの深部にある価値意識に関わることであって、恥意識を問題とする場合にあくまでその内実に添わねばならぬ理由もそこにあるのである。

一九一九年、第一次世界大戦の戦後処理のために開かれたベルサイユ講和会議が、日本の要求に妥協し、山東省旧ドイツ権益の日本移譲を承認したことに端を発して、「五四運動」が起こった。ウィルソンの十四か条原則に大きな期待を寄せていた中国国民は憤激し、民国はじまって以来のはげしい運動を展開した。この間の経緯は、軍閥政府の反民族性と世界帝国主義の実態を中国国民の前に暴露し、その先進的部分はようやく反帝・反封建の課題を明確に把握するにいたったのであるが、この時においても魯迅は、「狂人日記」の認識を変えることはなかった。世界の「人道」に対する悲觀と絶望を語る声があがると、「人類が未完成のものである以上、人道も当然未完成だ。しかしとも

「恥辱」的存在の形象について

かくそれは成長・発展しつつある、「見よ、かれらは軍国主義に勝利したのに、かれらの評論家はまだ自分で自分を責め、多くの不満を持っているではないか。不満は向上の車輪であり、それが自ら不満を抱く人類を載せ、人道に向かって前進させるのだ」、「人を責めるのみで反省を知らぬ人間の多い民族は、禍なるかな」（「随感録六十一」「不満」、一九一九年）とかれは述べた。彼我の乖離に対する魯迅の認識は牢固として動くことがなかったかのごとくである。

「諸公よ！ あなたたちは知っているか。北京と崑崙山が何里離れているか、弱水は黄河から何丈隔たっているか。火薬は爆竹をつくる以外に、磁石は地相・墓相を見る以外にどんな用途があるか。棉花は赤いか白いか。穀物は木になるか草になるか。桑間濮上はどんな光景で、自由恋愛はどんな態度か。あなたは夜中ふと羞恥に見舞われることはないだろうか。早朝ふと後悔に襲われることはないだろうか。四斤の荷物をあなたは担^おえるか。三里の道をあなたは走れるか」（「随感録六十二」「恨みをのんで死ぬ」、一九一九年）

魯迅のとりあげた項目は、一見ばらばらに見えて、決してそうではない。科学・技術・恋愛・労働・体力に関するこれらは、人間の根源的な「生命力」の問題として統一的に把握されているのである。この「生命力」は、「われわれは今日どのようなにして父親となるか」に、「労働に耐える体力、純潔で高尚な道德、新潮流を受け入れることのできる広く、自由な精神」つまり「よく世界の新潮流に遊泳して、沈没することのない力」というものと同じである。

「狂人日記」が示している魯迅の認識が、「五四的偏向」と私がひそかに名づけている一つの「偏向」をもっていたこと、さらにその「偏向」がただされ、一つの「全体性」が獲得されていく過程がいかに苦痛に満ちたものであったかということ、これを私は小論全体を通じて明らかにするつもりであり、ここでの性急な概括は避けたいと思う。ただ一言述べると、この「偏向」の時期にあっても、魯迅において「国粹と洋化の皮相な争いは、民族の文化の根

源的な開かれた活力という場で決着を済まされていた⁽³⁾という見解に私は基本的に賛成である。たしかに「外国の事物がひとたび中国に到来するやたちまち黒い染料墨に落ちたように変色する」(『隨感錄四十三』、一九一九年)、新しい學問が「外国の技術を學んで、中国の旧習を保存する」(『同四十八』、同年)手段と化するような状況の中でこそ、「All or nothing!」(同上)という一見「全面洋化論」かと見まがう發言はなされたのであった。だがそれにもかかわらず、彼我の間の乖離に対する認識(羞恥)と、「真の人間」、「人類」、「人道」、「進化」という模範・兆候とが魯迅を規定することのいかにつよかったかということ、この一点を、私は木山英雄氏らの見解につけ加えたいと思う⁽⁴⁾。この点にこそ、「五四」期の魯迅の態度が、「胡適などの『全面洋化』論といかにもよく呼応しているよう⁽³⁾」に見える理由があったのである。

「民族的恥辱感」とも言うべきものは、「おくれたアジア」の知識人たちを何らかの形でつき動かした共通の心理である。武田泰淳氏は「うしろめたさ」というやや曖昧でふくみの多いことばを用いつつ、この問題にふれている。

「文學者はいずれの国に生れても、美について倫理について人一倍敏感であり、自分という個人、その自分の属する民族、社会、国家の現状について徹底した觀察をせずにはいられない。殊にアジアの後進国に生れた文學者は、自己及び自己の周囲に対して、嫌でもその暗い否定的な面を感じとり、先進国の文明光線によってあからさまに照し出された、こちら側の皮膚の醜さに敢えてふれて見る。一般人に先だって一種の『うしろめたさ』を自己の創作衝動の底に凝固させ安定させていた。この『うしろめたさ』から出發したことで両国の作品は一致している。ただその『うしろめたさ』の内容が異っていたのである」(『中国の小説と日本の小説』、一九五〇年)

日本の良心的な作家たちが背負わざるを得なかったものは、「自己の精神の外部に遠くはなれて蔽として存在する

「恥辱」的存在の形象について

先進国の近代芸術と、自己の生存の周辺に密集してひしめくより後進の民族のうめき声、その両者におびやかされた、偽近代人のうしろめたさであった」と武田氏は言う。そうすれば、その屈折した恥辱感を表現するのに、この「うしろめたさ」の語はいかにも適切なものであった。そして武田氏は、この「うしろめたさ」をもっとも誠実に生きた一人にほかならなかったのである。しかし、中国の知識人たちをとらえた恥辱感は、「うしろめたさ」とよぶにはあまりに切迫した「自己批評」の鞭であった。⁽⁵⁾ 胡適の「帰国雜感」(一九一八年)に示された恥辱感も、そのまっすぐさにおいてこれと異なるものではない。けれどもそれは、民族の置かれた本質的な困難に自らせまっていく下降力を欠いた、欧米の道を絶対とする、「近代主義」に立脚するものであったために、中国民族の人間の回復につながる道を切り開く力とはなり得なかった。胡適の後年の文章「鏡に照らしていただきたい」(一九二八年)に示された恥の意識は、このことを明確に示している。⁽⁶⁾ 魯迅の恥辱感とその内実を同じくするものを他に求めるならば、陳独秀のこうした次の文章に見ることができであろう。それは「五四」の時代に中国の良心的な知識人たちが共有した一つの「民族的恥辱感」の実例であると同時に、中国人の朝鮮「三一運動」への連帯を示す歴史的証言でもある。

「こんどの朝鮮独立運動は、偉大、誠実、悲壮である。それは明瞭、正確な觀念をもち、民意をもとにして武力を用いず、世界革命史の新紀元を開いた。われわれはこれに對して、賛美、哀傷、感動、希望、羞恥(原文「慚愧」)などさまざまな感想をもつ……」

朝鮮民族の光榮ある行動によって、衰弱したわが中国民族の恥辱(原文同じ)はますます明らかになった。見よ。こんどの朝鮮人の行動が、武器を持たないからといって反抗する勇氣を失い、国の主人公としての資格を自ら放棄し、傍觀者となったものであるかどうか。われわれは、わが身を朝鮮の人々に比するにかぎりなく恥ずかしい(原

文「慚愧無地」(「朝鮮獨立運動の感想」、一九一九年)

傳斯年でさえもこれを受けて、「中国のいまもつとも憂慮すべき現象は、社会一般の人が改革事業が不可能と
思っていることである。これが中国人の永久に回復できない宿命だと考えていることである。みなは何もやらずにどう
して可能であろうか。みながやればどうして不可能であろうか。朝鮮人の堅固な意志をみよ。われわれは身の置きど
ろがないほどの恥ずかしさを感じ(原文「慚愧無以自容的地歩」)ないだろうか」(「朝鮮獨立運動の新教訓」、一九一九年)と
述べているのは、目前に「五四」をむかえる時代の熱気のありかをわれわれに示している。⁽¹⁾

ところで、「狂人日記」的な羞恥の意識に関連して、まだ言及しておかねばならぬ一つのことのこされている。
それは、「狂人日記」の作家を次の力作評論の執筆にかりたてたところの一つの動機についてである。「狂人日記」は
一九一八年四月二日に完成し、『新青年』四卷五号(同年五月刊)に発表され、評論「私の節烈感」は同年七月二十日
に脱稿し、同誌五卷二号(同年八月刊)に掲載されたが、その中間にあたる七月五日付の錢玄同宛魯迅書簡が近年発見
された。それはこの「私の節烈感」執筆の動機を如実に示している。同書簡の後半を次に引用してみよう。

「中国の国粹は、屁の如きものではあるが、一群の惡質の輩の叢編を刊行せんとするも奇とするに足らず。かの
輩は、いまだに人を食わんとするに過ぎず。しかれどもついに人肉を売りし履歷を有する偵心探龍をかついで祭酒
となし、太いに自覺するあるがごとし。この一事のみにても、小生をして刮目して相看さしむるに足り、『ああ恥
ずかしきかな』はなお二の次のことなり。小生はかつて袁朝の頃、晁帽(無名氏の語録に出づ)を戴き、爵を至聖先
師の大旦那の前に献ぜしことあり、閱歷することすでに多く、いかなる復古も、いかなる国粹も、恐ろしからず。
ただ、かの輩の屁誌の創刊が、もっぱら『新青年』に対して発するものとは、いささか不思議。初め思わざりき、

「恥辱」的存在の形象について

『新青年』のかれらにおける、かくも堪えがたからんとは。しかしてすでに刊行せんとするあらば、その刊行するにまかせ、しばらくその刊行ぶりを見、そのいかに国^{こく}ぶるか、いかに粹^{すい}ぶるか、いかに狂^{くる}うか、いかに屁^ひを放るか、いかに夢見るか、いかに探龍^{たんりゆう}するかを見るも、また一大快事ならん。国粹叢編万歳！老若の気狂いども万歳！⁽⁸⁾

！(引用は『魯迅書信集』上、一九七六年、人民文学出版社刊による)

「屁のごとき国粹」をかかげて蠢動するものたちの窮極の目的は、わが身の利益のために「吃人」社会を維持しようとするところにあり、それ自体当然の成り行きにすぎぬとしながら、劉師培らをかっぴいで新しい組織的な動きのはじまりつつあることに、魯迅はきつと身構えているのである。写真版で見る手跡のはげしいタッチは、「辛亥革命を見、第二革命を見、袁世凱が皇帝を称し、張勳が復辟を図ったのを見、あれやこれやと見てきた」(『自選集』自序)人間のおさえきれぬ鬱屈をそのままに示している。「その時、『文学革命』に対して、実はそれほど熱情を抱いていなかった」(同上)魯迅がながい沈黙を破って発表した「狂人日記」は、「吃人」社会に身を置く人間の苦痛と恥辱感が声をあげて、「吃人をやめよ」「人を食う人間は、人を食わない人間に対してどんなに恥ずかしいことか」と叫んだものではなかったか。『ああ恥ずかしきかな』はなお二の次のことなり」の語は、中国民族の「進化」(自己超克)をおしもどそうとする「敵」に対する「憎悪」の表現である。それは即「羞恥」の否定ではない。魯迅の「羞恥」そのものが、「敵」に対する「憎悪」を内包し、それを引き出す力をもっていたと見るべきであろう。そして「友」としての『新青年』の存在は、ほかならぬ「敵」側の反応から照射されて、その確認をかれに迫ったのであった。⁽⁹⁾「私の節烈感」を生み出した内心のダイナミズムは、およそ以上のようなものであった。魯迅における「羞恥」が「一億総懺悔」的なものと遠く隔った、正しく「批評」の名に価するものであったことを、この手紙は教えている。

(二)

一方に「吃人」、「来たぞ!」、「火と刀」、「暴君の臣民」などの語で象徴される民族像があり、他方にそれを照らし出す「人間」、「人類」、「進化」の語が示す模範と兆候がある。そしてこの両者が一個の人間の内部で接触し、火花を發する「恥辱」(羞恥)の意識——これら「五四」期の魯迅を規定する諸契機の内実を明らかにしようとして、私はいつの間にかもっぱら「隨感錄」と呼ぶ批評的散文を論じてきた。だが考えてみれば、それも理由のないことではなかったようだ。「狂人日記」は、上述の諸契機を一篇に引き受けて、民族的自己批評の口火を切ったけれども、そのため作品はきわめて特徴的な相貌を帯びることになった。一篇の主人公は一人の「狂人」として現れるはかなかったのである。狂人は小説の主人公たちがそれぞれに具えるべき個性を剥奪され、四千年の暗黒の歴史の前にまったくの裸身で立った。⁽¹⁰⁾ 中国近代文学の嚆矢となった作品の、それが一つの運命といふべきものであった。この作品をきっかけに、魯迅の批評的散文がつぎつぎと生み出され、のちに『熱風』と名付けることになる啓蒙の風を『新青年』に送りこんだことは、すでに見てきたとおりである。だが、最初の叫びが個性をもたぬ狂人の口から發せられたことは、同時に「県知事に枷をはめられたことのある」、「地主にぶんなぐられたことのある」、「役人に女房を寝とられた」、「高利貸に親を責め殺された」人々の個性をも奪い、一つの「吃人世界」にぬりこめてしまうことにもなった。この相互に、人を食いあう世界が、牢固として魯迅を規定した一つの民族像であったことは疑い得ないことである。「孔乙己」から「故郷」にいたる短篇小説群の世界も、読書人の心身を蝕む科挙制度、他人の不幸に対する無関心や

「恥辱」的存在の形象について

かえってそれを娯楽とする冷酷な精神、処刑見物におしよせる群衆、結核の特効薬と信じられる人血饅頭、人を騙る漢方医、皇帝復辟のニュースに翻弄される家族などを描いて、「吃人世界」の閉ざされた循環の系内を出るものではない。わずかに「小さなできごと」一篇が例外であるにすぎない。「故郷」においてもその自己完結的な系を破ろうとするのは、少年時代の美しい回憶を人間と人間とを隔てる深い溝の存在をまだ知らない眼前のこともたちの姿に重ねつつ、自分たちのあらがいの向こうに人間と人間の通じあう未来を見ようとする「私」の希望と意志以外にはあり得なかった。それはすでに見てきた「狂人日記」や「随感録」的批評的特徴的構造でもあるのだ。だがそれにもかかわらず、魯迅においてほかならぬ小説の執筆は、「狂人日記」および批評的散文とはおのずと異なる契機を内にほらまざるを得なかったように思われる。私がこれまで上述の諸契機を視野においてもっぱら「随感録」を取り上げてきた理由も、そこにある。以下この問題をめぐって、いくらかの観察を述べてみることにしたい。

魯迅は、「狂人日記」と「阿Q正伝」のあいだに七篇の小説をのこしている。

「孔乙己」

一九一八年冬作 『新青年』六卷四号（一九一九年四月）

「藥」

一九一九年四月作 『新青年』六卷五号（一九一九年五月）

「明日」

一九一九年六月作 『新潮』三卷一号（一九一九年十月）

「小さなできごと」

一九一九年七月作 『晨报創刊紀念』増刊（一九一九年十二月）

「風波」

一九二〇年八月作 『新青年』八卷一号（一九二〇年九月）

「髪の話」

一九二〇年九月作 『時事新報』副刊『学灯』国慶專輯（一九二〇年十月）

「故郷」

一九二一年一月作 『新青年』九卷一号（一九二一年五月）⁽¹⁾

七篇のうち作品世界の異なる「小さなできごと」、「髪の話」をのぞく五篇は、作者の故郷である紹興を思わせる一城市（県城）とその近在の農村「魯鎮」を舞台とし、いずれも『新青年』、『新潮』という「新文化運動」の拠点となった雑誌に掲載されて、全体として一見「郷土文学」風の年代記を構成する。むしろそれは単なる「郷土文学」ではない。のちの『朝花夕拾』が全体として一個のすぐれた文化史批判を形づくっているのに似て、五篇は「狂人日記」のあとを受けて、のちの「阿Q正伝」（一九二一年十二月）とともに、「辛亥革命」の「挫折」の意味を地方都市や農村社会の現実の中に探ろうとする動機につらぬかれている。

「多くの知人の顔が、私の眼前に浮かぶ。何人かの青年は十数年も苦心奔走の末に、どこからともなく飛んできた弾丸に生命を奪われた。何人かの青年は弾はあたらなかったが、牢獄に繋がれ一か月以上も拷問を受けた。何人かの青年は大志を抱きながら、突然行方知れずになり、死体さえどこに行ったかわからない。

……いまではもうかれらを埋めた塚も忘れ去られ、しだいにべしゃんこになってきた」（『髪の話』）

忘れようとして忘れられない多くの死や犠牲によって贖われた革命が見るうちに変質していった原因がどこにあったか。「棄」は「アンドレーエフ的陰暗」⁽¹²⁾をとどめながら、明確で硬質な構図の中にそれが民衆と革命家との隔絶にあったことをはっきりと示している。

『——若造の方も太い野郎だ！ ぶち込まれていながら、牢番に謀反をそそのかしやがる』

『ヘッ、とんでもないことだ』 うしろの方にかけていた二十歳あまりの若者が、ブンブンした様子で言った。

『いいかい、赤目の阿義はやつを取調べに行ったんだぞ。ところがやつの方から話しかけてきやがった。大清の天下はわれわれみんなのものだよ。考えてもみな。こいつが人間の言うことか。赤目は若造におふくろ一人しか

「恥辱」的存在の形象について

いないことは知っていた。ところが思った以上のひどい素寒貧で、一滴もうまい汁を吸えなかったから、いいかげん堪忍袋の緒が切れていた。そこへこのご託宣だ。そのまますむはずがない。パンパンとくれてやった!』

『阿義兄ィは腕が立つから、その二発はこたえたことだろう』隅にいたせむしが、急にうれしそうな声を出した。

『あのろくでなしめ、ひっぱたかれても平気なばかりか、可哀そうにと言いやがった』

白ひげの男が言った。『そんなやつひっぱたいたって、可哀そうなものか』

康大叔はばかにしたような様子で、冷笑した。『人の話はよく聴くもんだ。やつの顔つきではな、阿義が可哀そうとぬかしやがったんだ!』

聴いていたものたちの眼がたちまち光を失った。声もとまった。小栓はもう飯を食べ終えて、びっしり汗をかき、頭にまで湯気がたっていた。

『阿義が可哀そう——氣狂いの言うことだ、ほんとに氣が狂ったんだ』白ひげがはたと悟ったように言った。

『氣が狂ったんだ』二十歳あまりの若者もはたと悟ったように言った。

店の客たちも活氣をとりもどし、しゃべりはじめた。小栓もにぎやかさに乗じて、しきりに咳きこんだ。康大叔が近寄って、肩をたたいた——

『きつとよくならあ! 小栓——そんなに咳するんでない。きつとよくならあ!』

『狂ったんだ』せむしの五少爺がこっくりうなづきながら言った

秋瑾を記念する名をもつ革命家——夏瑜の思いがけぬことは、茶館の空氣を一瞬凝結させるが、やがてもとのに

ぎやかさがもどってくる。刑死した革命家の血をしみこませた饅頭を、民衆が黙々と食べる事態は、両者のこのような隔絶の上に成り立っている。一九〇七年、徐錫麟、秋瑾が殺害されたさいの暗い不安と恐れをこめて、「血を流すものがあるのにそれを見ず、或いはすすんでそれを殺そうとすならば、その社会たるや、禍ますます大きく、救うことはできない」(「摩羅詩力説」)と魯迅は書いた。かれの文章は、結果的には一つの予言となった。庸衆と天才、天才が庸衆に排斥され、虐げられ、殺される構図、それはすでに「狂人日記」にも見えたものである。徐錫麟の心肝が食われた事実を重ねられたにちがいない人血饅頭の血腥いイメージには、魯迅の痛い憤りがこめられてもいるだろう。けれども、「藥」の展開を維持した魯迅の衝動は、この庸衆と天才の構図をすでに超えているがごとくに見えるのはなぜだろうか。

超えていると言えば、この構図はすでに「狂人日記」においても超えられてはいた。長兄がただけだけの表情で、「みんな出て行け！ 氣狂いを見て何がおもしろい！」とどなったとき、狂人は次のように考えた。

「このとき、おれはまたひとつわかった。かれらの巧妙なくらみが、かれらは改心しようとしなばかりか、とつくに手を打って、氣狂いという名をおれにかぶせようというのだ。あとで食っても太平無事であるばかりか、感謝さえされるかもしれぬ⁽¹³⁾というわけだ。あの小作人が、みんなで悪人を食ったと言ったのもこの手だ。これはかれらの常套手段なのだ！」

「おまえたちいますぐ改心しろ、心から改心しろ！ いいか、将来人を食う人間は、この世に生きていけなくなるぞ……」という第十節最後の叫びは自分を押し殺そうとする「歴史と数」(庸衆)の重量の下から必死の努力であらがいぬけた狂人の声であった。しかし「おまえたち改心しろ」という叫びを、やがて一つの沈静の時間を経て、「人間

「恥辱」的存在の形象について

を食ったことのないこどもは、まだいるかも知れない？ こどもを救え……」という叫びに変化させたものは、すでにしつこいほどに言及してきた「自己の恥辱」——「四千年の食人の履歴をもつおれ」の発見が与えた衝撃である。

庸衆と天才の構図は、このように自己の恥辱の自覚によって、つまり天才の天才たる基盤の崩壊によってすでに超えられてはいたのである。魯迅はこのような自己と民族との暗黒の認識を媒介にして中国の民衆に接近したのである。

だが「薬」においては、庸衆と天才の構図は、これとちがった方角から超えられた。一篇の展開を支えた作者の衝動は、あの「暴君の臣民」そのままに夏瑜の死刑見物に群がり歓喜のため、息をつく民衆を描かず、ことさらなけなしの金をはたいて人血饅頭を買い求める老栓夫婦の姿を中心にすえさせたのである。人血饅頭とは、罪深い迷信とはいえ肺結核の特効薬なのである。夫婦は息子小栓の生命を救いたい一心で、なけなしの銀貨をはたいたのだ。

「かれ（老栓——引用者）の精神は、いまはただ一つの包み（人血饅頭のはいつた——引用者）の上に集中した。一人息子ばかりで十代やとつないできたその十代目の赤子を抱いているような気持だった。それ以外のものは何も眼中になかった。かれはいまこの包みの中の新しい生命を、自分の家族に移植し、たくさんの幸福を手に入れようとしているのだ」

「小栓はこの黒いものをつまみあげて、じっと見た。自分の生命を手のひらにのせているようで、言うに言われぬ変な気持であった」

小説の作者として、老栓一家の日常生活に下降したとき、魯迅がつきあてたものは、民衆のもつこのような「生への意志」である。生きがたさにうちひしがれながらそれでも何とか生きたいとあかく個別的な民衆の姿である。恥辱にまみれながら、這ってでも生きようとする読書人（孔乙己）。三歳の息子を抱き医者をもとめて炎天の下を歩きま

わる寡婦の単四嫂子（『明日』）。息子を死なせた夜、寡婦はいつもと変らぬ『明日』の存在をわが身に信じさせようとして、次のように考える。

「ただの夢なんだ、みんな夢なんだ。明日目を醒ましたら、私はちゃんとベッドに眠っていて、宝児もちゃんと私の横に眠っていて。あの子も眼を醒まして、『母ちゃん』と私を呼ぶと、鉄砲玉のように駈け出して遊びに行くだろう」（『明日』）

さらに、皇帝の復辟がもたらすであろう家族の崩壊におののく七斤の一家（『風波』）。自分が親にはめてもらった魔除けの銀の首輪さえ息子に与えることができない閨土の、盗みまがいの行為や偶像崇拜も、この「生への意志」の現れ以外のものではない（『故郷』）。「薬」の茶館の場の構図が、単なる庸衆と天才のそれと区別され、かつそれを超えたのは、固く閉ざされた構図に浸透するこの「生への意志」の存在によってである。一つの書き割りの前に老栓の店の野次馬たちを配置してみよう。康大叔の紹介する夏瑜のことばが投げかけた波紋がさつと舞台をよぎっていくと、一瞬時間は停止し、空気は凝固する。「氣狂いだ」ということばでやがて以前のにぎやかさをとりもどす間の舞台は、上下から二すじの薄光に照らされている。やがて喧噪がもどると薄光はよどんだ灰色に紛れていつの間にかうち消される。万人の生のために一死を顧みなかった夏瑜の意志と、小栓の生のためになけなしの銀貨をはいた老栓の意志とは、本来共通のものとしてしっかりと結合されるべきものでありながら、この舞台の上では決して触れあうことなく、それぞれ孤独な光を発しつつ、ともにある強暴な力によって抹殺されてしまうのである。人血饅頭とは、この悲劇的な隔絶の結晶体にはかならない。さきに引いた文章をもう一度引用してみよう。

「かれはいまこの包みの中の新しい生命を、自分の家族に移植し、たくさんの幸福を手に入れようとしている

「恥辱」的存在の形象について

のだ」

「新しい生命」（原文「新的生命」）は、かつて若き魯迅らが企てた文学運動の象徴として、かれらの雑誌の表題に擬せられたものであった。かれらの運動は、やがて「辛亥革命」となって爆発する一団の熱気の一部として、「新しい生命」を中国の民衆に移植し、たくさんの幸福をつくり出すべきものであったのだ。それはもともとそうあるべきものであった。不幸な「革命」のち八年にして魯迅は、「われわれの流産した『新生』」（『呐喊』自序）を不幸な人血饅頭に託して、刑場から老栓の家への道をたどらせ、土中深く埋葬したのである。そのため郊外の共同墓地には、二つの、土饅頭が新しくつくられた。夏瑜の塚と小栓の塚は、「一」の字に並んで、その間をわずかに一本の小道が隔てているにすぎなかった。清明節の日夏瑜の塚の頂きにたむけてある紅白の花環がひとつ。周知のようにのちに魯迅はこの花環の描写を称して「曲筆」と言い、次のように述べている。

「呐喊であるからには、当然主将たちの命令を聴かないわけにはいかなかった。そこで私はしばしばあえて曲筆を用い、『葉』の瑜児の塚にいわれもなくひとつの花環を添え、『明日』でも単四嫂子がついに息子に会う夢を見なかったとは書かなかった。当時の主将たちが消極をきらったからである。だが私自身も、自分でも苦しくてならぬ寂寥を、これ以上私の若いころと同じく甘い夢を見ている青年たちに伝染させたくはないという気持もあったのだ」（『呐喊』自序）

「自序」そのもののはのちに取りあげることになるが、「曲筆」を言うならば、それは単に花環に限られるものではない。魯迅は「葉」の終章においてさらに、その花環を見、我子の何もない塚と見較べて急に「ある物足りなさ」と「空しさ」を感じる華大媽（小栓の母親）を描くことを忘れなかった。花環を恨みをのんで死んだ夏瑜の現した霊驗と考

えた夏四奶奶（夏瑜の母親）が、「おまえもしほんとうにここにいて、お母さんの話を聴いているなら——あの鳥をおまえの塚の上にとまらせて見せておくれ」と再度の靈驗を求めたとき、むろん奇蹟は起こるはずもなかった。華大媽は「なぜだかほんとと重荷をおろしたような」気持になり、「さあ、帰りましょう」ともう一度夏四奶奶に声をかけた。カア—と叫んで遠くの空をめがけて矢のように飛び去る鳥を背後に、二人の老母が、愛する息子を奪われた共通の悲しみにつながれて、肩をならべて歩いていく——その後姿に、われわれは「曲筆」にかけた作者の祈りと意志の真実を見ることが出来る。革命家と民衆の隔絶は、所詮は民衆と民衆（人間と人間）の隔絶の上に存在するもの（これは「狂人日記」の発見したものである）であるが、華大媽と夏四奶奶は同じ悲しみによってその隔絶を埋めているのである。われわれは、ここにも「五四」期魯迅の作品を含む真実と『呐喊』自序との間にある微妙なずれを見出すことになる。さらにこの「自序」の中で、魯迅が「五四」期のかれの文学的出発のほとんど唯一の内因として取り出した「寂寞」の起源を、かれらの文学雑誌『新生』の失敗に見ている事実に関連して一つの類推を許していただくならば、魯迅が流産した「新しい生命」を不毛な人血饅頭に託してひそかに埋葬したとき、かれの言う「寂寞」も同時に埋められたにちがいない。「寂寞」はだれよりも魯迅自身が、「人間」の兆候に照らされつつ、自分の努力で破るべく決意したものであって、たしかに一度はこうして埋められたのである。私はこのことの真実を疑い得ないと思う。もしこれをも「甘い夢」（「好夢」というのなら、「甘い夢」は当時の魯迅自身のものでもあったのである。そうした意味では、「故郷」はもっともよく「五四」期魯迅を代表し、「呐喊」の「呐喊」らしさを示す作品である。二十年ぶりに、別れを告げるために故郷に帰った「私」がそこで見出したのは、苦しみの中で木偶（でく）のように麻痺してしまった少年時代の「英雄」の閑土の姿と、二人の間にできてしまった深い溝の存在である。「私」は、その悲し

「恥辱」的存在の形象について

むべき隔絶を自分たちのあらがいの継続によって埋め、かつての自分たち同様人と人との隔たることを知らないでいる宏児と水生の世代が、ふたたびこの隔絶によって苦しむことのない、まったく新しい生活をもつようにしなければならぬという願望と決意とを語る。たとえ「偶像」であるにしても、と魯迅は微妙な心情のたゆたいを述べているけれども、それはのちに短篇小説集『彷徨』の冒頭に置かれる「祝福」(一九二四年)の「私」が、乞食となった祥林嫂の発する問いと視線の前に沈黙し、遁走するしかないのとまったく対照的である。これは言うまでもなく、あの「自分は因襲の重荷を背負い、暗黒の閨門を肩で支えて、かれらを広びろとした光明の場所へ放してやろう」(「われわれは今日どのようにして父親となるか」)という「五四」期魯迅の基本的な立場と態度の確認であり、篇末の「希望とはもともとあるものとも言えないし、ないものとも言えないものだ。それは地上の道のようなものだ。歩く人が多くなれば、それが道となる」という人口に膾炙したうつくしいことばは、先に引いた「随感録四十九」や「随感録六十六」「生命の路」と同様、魯迅を照らしたす「人間」の兆候の所在をはっきりと示している(これがともに「道」のイメージで語られていることはきわめて特色的である)。その構造は「狂人日記」篇末部と同じである。けれども閩土における個別性の回復は、「子だくさん、飢饉、重税、兵隊、匪賊、役人、地主」によって木偶のようにされてしまった一人の民衆の姿を、少年時代のかれの潑刺とした姿とともに、いつまでも記憶にのこるあざやかな影像に焼きあげたのである。

魯迅における小説の執筆が、このようにおのずと内にはらんだ別の契機は、しいて名付けるならば一つの「人民性」とも言うべきものであった。「孔乙己」以下の小説は、「狂人日記」および後続の散文と異なり、魯迅の民族認識が、その区別と統一においてまだ混沌としたものでありながらも、かれの民衆認識と不離不可分であるといううなみなみならぬ事実を、語らずして完璧に示している。このことが、魯迅を胡適以下の『新青年』の驍將たちと分かち、かれを

すぐれた民族的文学者につくりあげた最大の要因である。魯迅の体内にこの「人民性」を育てたものが何であったか、それは主としてかれの自己形成の伝記的事実に関することであるが、ここでは、後年魯迅自らほどこしたもつとも概括的な説明を借りて、この問題の眺望を得ておくだけにとどめたい。

「中国の詩歌には、時々下層社会の苦痛を述べたものもある。ところが絵画と小説はこれに反し、たいいていかれらを幸福に満ちた存在に描きなす。『識らず知らず、帝の則に順う』、平和なことまるで花や鳥と同じである。たしかに、中国の苦しい民衆は、知識階級の目から見れば、花や鳥の同類なのだ。⁽¹⁵⁾

私も都市の大家族の中で生長し、幼少から古い書物と師傳の教えを受けたため、苦しい民衆を花や鳥と同じに見なしていた。しばしばいわゆる上流社会の虚偽と腐敗を感じたとき、かれらの安楽を羨しくさえ思った。けれども私の母親の実家が農村であったことは、間々多くの農民と親しく接する機会を私に与え、私はしだいにかれらが一生圧迫を受け、多くの苦痛をいただき、花や鳥と決して同じでないことを理解するようになった。ただ私はまだこれをみんなに知らせる方法を知らなかった。

のちに外国の小説、特にロシア、ポーランド、バルカン諸小国のものを読み、ようやく世界にもわれわれの苦しい民衆と運命を同じくする多くの人々が存在すること、さらにかれらのために叫び、たたかっている作家たちが存在することがわかった。これまでに見てきた農村の情景も、いっそうはっきりと私の眼前に再現した。たまたま文章を書く機会を得て、私はいわず上流社会の墮落と下層社会の不幸を、つぎつぎに短篇小説の形式を用いて発表した。実際の意図はこれを読者に示し、いくつかの問題を提出しようとしたにすぎず、当時の文学者の言う芸術のためではなかったのである」〔英訳本『短篇小説選集』自序、一九三三年〕

「恥辱」的存在の形象について

すで見えてきたように、「五四」期魯迅の文学は、単に「下層社会の不幸」を描いて、社会に対し「問題を提出」したものとするとらえ方だけではおおうことのできない諸契機が複雑にからまっている。魯迅が「暴君の臣民」のごとき暗い民族像にとりつかれていたこともなお消しがない事実である。しかしこれまで取りあげてきた数篇の小説は、民衆の直接的日常的な「生への意志」にわくづけられて、おのずと「随感録」的批判と異った色彩を呈し、「下層社会の不幸」をわれわれの前に摘出して見せることになった。それがまず魯迅の「人民性」のこの期における現れであったことはたしかである。けれどもより基本的なことは、正であれ負であれ、光榮であれ恥辱であれ、民衆の認識が民族の認識の中心に据えられるほかのありようがない一人の民族的作家の形成を、この文章は語っている。瞿秋白がこの序文の書かれるのとほとんど同じ時期に書いた有名な『魯迅雜感選集』序言（一九三三年）中で、魯迅を狼の乳で育てられたレムスに比し、「野獸性」と呼んだもの——それがここにいう「人民性」にほかならない。

(三)

郊外の墓地の踏み分け道を、息子を失った悲しみにつながれて歩いていく二人の老母の姿——この悲しみそのものはやや性格を異にするけれどもすでに「狂人日記」にも見えていた。狂人の妹が死んだとき泣きに泣いた母親の姿は、「日記」第十一節に一つの「謎」として書きとどめられている。

「（兄が妹を食べたことを——引用者）母も知っていたのだと思う。だが声をあげて泣きながら、母は何とも言わなかった。たぶん母も当然のことと考えていたのだろう。おれが四つか五つだった。広間の前で夕涼みをしていると

き、兄が、息子たるもの父母が病氣になったら、股の肉を切りとって煮て食べてもらってこそりっぱな人間（原文「好人」）だという話をした。母もいけないとは言わなかった。ひとときれ食えれば、全部だつて食えるはずではないか。けれども、あのときの泣き方はいまい思ひだしても胸がしめつけられる。まったく不思議なことだ！」

つづく第十二節で、そのとき自分も妹の肉を食べさせられていたのかもしれないことに思ひいたったとき、即座にこの「謎」は解けた。「吃人世界」に生きて、相互に食いあわねばならぬ運命的な苦痛と悲しみを、母の慟哭のはげしさは示していたのである。「薬」の終章で魯迅は、息子を亡くした苦痛と悲しみを共有する、二人の母親を描いた。人はまず「生命を保存しなければならぬ」（「われわれは今日どのようにして父親となるか」と述べた魯迅とはいえ、この二人の後姿を「人間」の兆候と呼ぶにはあまりに生の直接性に即きすぎている。けれども、魯迅がもう一度、まったくの第一歩から歩きはじめることを決意したとき、ここよりほかにどんな出発点があったであろうか。「希望とは道のようなものだ」、「歩く人が多くなればそれが道になる」と言ったのも、この無から踏み出すことの決意にほかならない。この決意のもとに、「髪の話」では自己の分身であるNのとめどもない挫折感の吐露を「聴きたくもない」、「支離滅裂」（原文「離奇」）の言として拒み、「風波」では「魯鎮」での一場の「から騒ぎ」と、その結末に「このごろ纏足をはじめた」六斤の姿とを描くことによって、「民衆の中では革命は挫折、すらして、いなか、つた」ことを明らかにしようとしたのである。それは同時に、『新生』の流産以来、「辛亥革命」の「挫折」の過程を経て、「一日一日と大きくなっていき、まるで大きな毒蛇のように、私の魂にまといついてはなれぬ」「寂寞」（『呐喊』自序）、その後「麻醉」によってようやく耐えてきた「寂寞」を、心中深く埋めることを意味したはずである。丸山昇氏が『魯迅——その文学と革命』（一九六五年、平凡社刊）において、「革命を窮極の課題として生きた魯迅が、文学者魯迅を生

「恥辱」的存在の形象について

み出す無限の運動」をたどることをその立場としつつ、魯迅が「『呐喊』自序」の中で、「狂人日記」執筆のほとんど唯一の内発的なものとしてとりだして見せたこの「寂寞」の内実を明らかにするために、この著の約半分を「いわゆる《寂寞》について——魯迅における辛亥革命——」に充てているのは、きわめて正当であると私も考える。「狂人日記」の成立が、この著においてはじめて全面的に「魯迅における《革命》の復活」としてとらえられたことの意義は大きい。前稿で述べたように留学期魯迅と「五四」期魯迅の間には、「辛亥革命」の「挫折」の過程がかれの精神に与えた深傷をうかがわせるに十分な、民族認識と自己意識との変化を認めることができる。だが、魯迅の自覚する課題そのものに特別の変更が生じたわけではなく（これは留学期魯迅の思想の先駆性を語っている）、たしかに「五四」期魯迅の文学的出発は、かれにおける「革命」の「復活」を意味したのである。たとえば留学期魯迅の次のことばを思い出してみよう。

「迷妄の者とその是非を同ずることなく、ひたすら信ずることを行い、……たとい譏笑辱罵を加えられ、世に孤立させられても、懼れることがなかったならば、幽暗を天日の光で照らし、国人の内曜を発せしむることができるであろう。そうすれば人各々自己を持ち、風波に揺がず、中国もまた自ら立つことができる」（『破惡声論』）

文章前段に言う天才・英雄に己れを擬する青年客気はすでに失せていたとはいえ、国民一人ひとりの「立意改変」（自己超克の決意）に「亡国滅種」の危機を脱する道を見る魯迅の考えに毫も変わりはない。小説「風波」に、相も変らず「風波」に揺らぐ民衆の姿を表現する文学のいとなみが、単なる挫折感の吐露を超えて、「革命」の「復活」を意味していることは明瞭である。魯迅のリアリズムの真価もそこにある。ただ私が新しくつけ加えたいのは、「狂人日記」以下の文章を「いまでもまだ昔の自分の寂寞の悲しみが忘れられないためであろうか、あの寂寞の中を走ってい

く勇士たちを少しでも慰め、思いきり先駆けてもらうため」にあげた「呐喊」と呼んだ『「呐喊」自序』の説明にとられず、そのほかにより内発的な「恥辱」「羞恥」の契機や「人間」「人類」の兆候・模範、そして「寂寞」の埋葬を認めようとするものである。「人類は決して寂寞ではないだろう。生命は進歩するものであり、楽天的なものだから」(『随感錄六十六「生命の路」』)という語は、魯迅における民族としての本能的牽引のつよさを思うならば、この「寂寞」を破り、中国民族を「人類」のゆるぎない一員として再生せしめようとする決意とほとんど同義である。このような決意が『新青年』を中心とする一団の熱気の中で、魯迅の執筆を促したのである。

『新青年』の刊行が、北京の軍閥政府と守旧派の攻撃を受けながらつづけられたものであることは言うまでもないことであるが、ここに結集する潮流は、『毎週評論』、『新潮』の創刊(一九一八年十二月、一九九年一月)、『晨报』副刊の改組(一九九年二月)とつきつぎに傍流をつくり出して、「五四」運動を迎え、さらに「六三」へと発展する高揚期(一九九年五月刊の『新青年』六巻五号は「マルクス主義特集号」となった)の中で、第一次世界大戦後に出現した国際状況の変化を反映しつつ、内部の思想的対立をしいに露呈してきた。一九九年六月に陳独秀が逮捕、投獄され、それとほぼ同時期に「問題と主義」をめぐる論争が胡適と李大釗の間で起こる。翌二〇年初め陳独秀の上海行きにともなつて、『新青年』の編集業務は北京を離れ、同誌はいつそうマルクス主義的色彩をつよくしていく。同年十二月北京政府が同誌の郵便局での取扱いを禁止すると、『新青年』同人の内部対立はいつそう明確になり、雑誌の存続と編集方針をめぐる、同誌のマルクス主義的方向に反対し、編集部をふたたび北京にもどそうとする胡適らと陳独秀、李大釗らとの間に複雑なやりとりがあったあと、事実上『新青年』は分裂する。魯迅の「故郷」はちょうどその頃に書かれ、編集部を上海からさらに広州に移した同誌九巻一号に発表されたものである。この間における魯迅の態度がどのようなものであ

「恥辱」的存在の形象について

ったか、今日事実問題に限ってもまだ十分明らかにされていないが、早く「随感錄五十六」「來たぞ」、「同五十九」「聖武」は、すぐその後に起こった「問題と主義」論争においてかれが少くとも何らかの形で「主義」の側に立つ人間であることを示しているし、一九二一年一月三日付胡適宛書簡は「五四文化革命」の担い手としての『新青年』が存続するかぎり軍閥政府の弾圧を免れ得ないことのリアルな認識を示して、「政治を談ぜず」という宣言を出して軍閥政府との事実上の妥協をはかろうとする胡適らの立場との明確な相違を見せている。けれども、われわれはなによりも分裂の危機のさなかに書かれ、たとえ説明とは言え閩土を木偶のような存在としてしまった元兇として「子だくさん、飢饉、重税、兵隊、匪賊、役人、地主」をとり出し、自らのあらがい（原文「辛苦展転」）の継続を確認して、「歩く人が多くなればそれが道になる」「道」を示した小説「故郷」の中に、『新青年』の存続にかける魯迅の期待のありかを読みとることができるであろう。

だが歴史が示すように、分裂は避けられず、中国現代史はこの分裂の中から新しい方向をさぐるほかはなかった。魯迅は、中国共産党の結成へとすすむ李大釗らとも、かれらに反対して『努力週報』の発刊を企てる胡適らとも異なった中間派とも言うべき立場にあつたので、この分裂からこうむった打撃はもつともつよかった。分裂後の北京の状況を、魯迅のちに「北京は『五四運動』の発源地であつたが、『新青年』と『新潮』を支えていた人々が散りぢりになつて以来、一九二〇年から一九二二年までの三年間、さながら寂寞・荒涼たる古戦場の觀を呈した」（『中国新文学大系』小説二集序、一九三五年）と書いている。周知のように、いくどか引用した『自選集』自序」の中で、かれはこうも述べている。

「のちに『新青年』という団体は散りぢりになり、あるものは出世し、あるものは隱遁し、あるものは前進した。

私は同一陣営の戦友たちが、このようにも変化し得るものだということをまたしても経験した。その上「作家」という称号が頭の上に落ちてきて、依然として沙漠の中を行ったり来たりすることになった」

「またしても」という語にこめられた感慨は、もっと重視する必要があると私は考える。そのことは、一九二四、五年の作品を検討してみることによってより明らかになるであろうが、(というより、この感慨の痛切さを抜きにしてこの期の作品は読みたいというべきであろうが)、『呐喊』自序に言う「甘い夢」がいく分かはかならぬ魯迅自身のものでもあったこと、かれの作品が単なる「曲筆」でなく、むしろかれ自身の「寂寞」を埋葬し、第一歩から歩みはじめるためのいとなみでもあったことを強調してきたこの小論の一つの帰結でもある。一九二〇年の『新青年』誌上の「随感錄」はもっぱら陳独秀によって書かれ、魯迅は「風波」、「髪の話」の小説二篇、「ツァラトゥストラ序言」、「労働者セウイリオフ」、「幸福」(後二者はアルツイバシエーフ作)の訳業のほかは、「随感錄」風の批評文を一篇ものこしていない。のちに一本にまとめて編刊された『熱風』はこの年まったく空白である。一九二一年一月に「故郷」を執筆した後は、訳業に相当の力がそがれているが、一方で主として『晨報副刊』に発表された雑文(『熱風』収録の「知識は罪悪である」、「事實は雄弁に勝る」、未収録の「生きて降るも死んで降らず」、「名前」、「無題」など)⁽¹⁹⁾は「随感錄」の作風と截然と分かれたれ、いままで強力な牽引・連帯の契機によってたえず引きもどされてきた憤激や憤懣が出口を求めて小出しに噴出する気配を見せている。こうした意味でも、分裂の危機の中で書かれた「故郷」は、「五四」期魯迅をもっともよく代表し、「呐喊」の「呐喊」らしさを示す作品、それも最後の作品と言うことができるのである。

(四)

「阿Q正伝」は「故郷」執筆の約一年後、一九二一年十二月から翌二二年二月まで九回にわたって『晨报副刊』に連載されたものである。「魯迅」のかわりに、古代楚の国の俗曲の名「下里巴人」から「巴人」の二字を拾って署名とし、舞台には新しく「魯鎮」の隣村でこれも架空の村「未莊」が選ばれた。「狂人日記」のあと、魯迅の批評的散文と小説とは丸山昇氏が述べるように「かなり明瞭な二正面作戦のあとをとどめて」⁽²⁰⁾進行してきたのであるが、それはふたたびここで合流し、いままで見てきた魯迅の民族に対する反撥・離反、牽引・連帯の諸契機这一切が、この一篇にぶちこまれてゐる。すでに登場した「魯鎮」や「郇城」の人物たちは、それぞれの作品の中から出て、この一篇に集まってくる。夏瑜(薬)は城内で処刑される革命党として阿Qの「賞玩」に供され、寡婦の単四嫂子(明日)は趙家の女中呉媽に、城内で弁髪を切られた七斤(風波)はそのまま隣村「魯鎮」の七斤として、青面の阿五、赤鼻の老拱(明日)はひげの王やその他の遊び人(原文「閑人」)に、康大叔、赤目の阿義(薬)は地保に、趙七爺(風波)は趙旦那や錢旦那に、丁拳人(孔乙己)は城内の白拳人に、そしてN氏(髪の話)は注目すべき転変をとげてこの作品の重要人物、ほかならぬ阿Qのもっとも「きらい」な、毛唐として、この一篇に配置される。「狂人日記」以来なかなかの工夫と実験を示して「近代文学」の実績となつたまままでの諸作品とは対照的に、小説の手法はむしろ「三教九流に入れてもらえぬ小説家たち」直伝の章回体になつき、言語も表現もしばしば土のおいがぶんぶんする土俗の相貌を見せる。「辛亥革命」の「挫折」の意味を「魯鎮」や「郇城」の現実の中に探ろうとしておのずと年代記風

の展開をしてきた小説の世界は、この作品でようやく「宣統三年九月十四日」（陽曆一九一一年十一月四日）、「双十節」の名で記念される「武昌起義」から二十五日目の紹興光復の日前後に照準を合わせるにいたる。このようにして設定された世界を、こんどは「狂人」ならぬまっとうな人間、「働かぬかぎり飯の食えない」阿Qが背負うことになるのである。それは、友軍の陣営の解体によって孤立を強いられた一人の戦闘的な文学者が、「呐喊」から「彷徨」へのとっかかりで試みためざましい方法上の冒険であった。

魯迅は、「阿Q正伝」第一章の冒頭で、「私が阿Qのために正伝を書こうと思うようになって、もう一、二年にとどまらない」、書こうとするたびに思いとどまることがあつて今日に及んだが、いまこうして書きはじめる自分を思うと、「心の中に幽霊（原文「鬼」）が住んでいるかのような気がする」と書いている。思うに幽霊とは「五四」期魯迅における批評的散文と小説の分裂がどうしてもその表現を妨げていた一つの衝動であり、この衝動がその分裂をのり超えて結んだ影像が阿Qではなからうか。

阿Qの影像をもし「随感録」風に言うならば、それはのちに「阿Q精神」の名で一つの民族的なシンボルとなった「奴隸根性」であり、その核心をなすのが「精神勝利法」である。この「精神勝利法」の批判は、「破惡声論」以下、「中国は土地広大、物産豊富、もっとも早く開化し、道徳は天下第一である」という申説からはじめて、「中国の思想が狂っている（原文「昏乱」）と言うのなら、それは正しくわが民族のなしとげた事業の結晶である。祖先から狂っていたし、未来の子孫にいたるまで狂いつづけるのだ。……（われわれは四億の民族だ）きみに滅ぼせるか」という自己の醜惡をもつて人に誇る戊戌説までを開陳してよく知られる「随感録三十八」（一九一八年）などを代表として、魯迅の文章のあちこちに見られる。その中でも、一九二一年五月に書かれた「生きて降るも死んで降らず」は、その内容と執筆の

「恥辱」的存在の形象について

時期から言つて気にかかる文章であり、短い上にあまり紹介されていないので、以下ほぼ全文を引いてみよう。

「およそ十五年前、私は革命党に騙されてしまった。

かれらは、革命しなければならぬ！と言った。見よ、漢民族がいかに奴隷となることを願わないか、いかに日夜光復を待ち望んでいるか。……一例を挙げれば——とかれらは言った——漢人は死んで棺に入るとき、みな弁髪を巻きあげて明朝の制度に似せる。これが『生きて降るも死んで降らず』である、と。

生きて降るも死んで降らずとは、何といたましく同情に値することであらう。

けれどもここ数年来、私の迷信は破れてしまった。多くの人の計文を見るに、かれらのほとんどは殉難者でもなければ遺民でもなく、清朝とはまったく無関係か、中には民国の『禄』を食んだ者もいるのに、ひとたび死ぬや、『清封朝議大夫』でなければ、『清朝恭人』と化し、あの世で三跪九拝して朝廷に参ずるのだ。

そこで私は革命党の話を信じないことにした。ただ、ほかのことはすべて偽りであるが、漢人に一種の『生きて降るも死んで降らず』という式の奇怪な性癖があることだけは真実だと私は思う」

この文章の吐き捨てるような語調は、さきにあげた二一年の雜文諸篇にほぼ一貫して見られ、「五四」期の批評文とそれらを分かつ一つの特徴であるが、自己の体験の埋葬というよりむしろ暗い憤りをこめて「辛亥革命」の無意味化が語られているのと同時に、「生きて降るも死んで降らず」つまり「死んで降らず」に藉口して「生きて降」って恥じない奴隷精神が、明確な「精神勝利法」として「国民性」の中に位置づけられていることは注目すべきことである。魯迅はのちにより冷静に、より概括的にこの「精神勝利法」について次のように書いている。

「中国人は各方面を正視することができず、偽瞞と詐偽（原文「瞞和騙」）とを用いて奇妙な逃げ路をつくりなが

ら、自分でまともな路だと思っている。この路は国民性の怯弱、怠惰、さらに狡猾を証明している」(「眼を開いて見るを論ず」、一九二五年)

「阿Q正伝」の第二、第三章「勝利の記録」「続勝利の記録」で、魯迅の筆はこの「奇妙な逃げ路」を阿Qにつきつぎに演じさせていく。阿Qは自尊心がつよい。「おいら昔は——おまえなんかよりずっとえらかったんだ。おまえなんか何だい」あるいは「なあにおいらの息子はおもととずっとえらくならあ」と、それは未荘の住民を全く眼中に置かぬほどだ。だが、かれはどうしたわけかよくけんかに敗れる。けんかに敗れた阿Qは「息子に殴られたようなものさ」と考えて敗北を勝利に転ずる。阿Qがかかる妙手の持主であることを知った遊び人が、殴るまえに「人間が畜生を殴る」のだと阿Qの口から認めさせようとすると、かれは次のように言う。

「虫けら(原文「虫豸」)を殴るのさ。なあいいだろう。おいら虫けらさ。——もう勘弁してくれ」

五、六回コッソコッソと阿Qの頭を壁にぶちつけて敵が意気揚々と引きあげたあと、阿Qもわれこそは「自分を軽蔑できる第一人者」だと考えて意気揚々と引きあげる。これは「虫けら」から「人間」にいたる進化の路を示して改心を説いたあの「狂人」への無恥で不逞な挑戦である。賭場ではじめてうず高くかせいだ銀貨をかつばられ、息子に盗られたと考えても、自分が虫けらだと言っても口惜しさを消すことができないと、力いっぱい自分で自分の頬をたたく。「たたいたのが自分で、たたかれたのが別の自分で、やがて自分が他人をたたいたような気持ちになり」、阿Qは意気揚々と横になるのである。むしろ阿Qが自分の頬をたたくのは、屈辱を転嫁できる相手がいないということにすぎない。阿Qはまずこのように「無恥」なることによって「恥辱」的な存在なのである。

後年「阿Q正伝」の戯曲化についての意見を求められたさいに「私の方法は読者に、描かれているのが自分と無

「恥辱」的存在の形象について

関係なだれかのことだと思わせ、たちまち他人に押しつけて傍観者になってしまわれぬよう、自分のことを書いたのではないか、あるいはすべての人間を書いたのではないかと疑わせ、それによって反省の路を開くことにあった」（『戯』週刊編者に答える手紙、一九三四年）と、魯迅は述べている。このことから、作者の動機がこの「精神勝利法」を核とする「国民性の弱点を暴露する」（再び保留を論ず、一九三三年にこのように言う）点にあったと考えるのがごく自然なとらえ方である。したがって、作品冒頭に言う「幽霊」とは、民族のこの恥ずべき「劣根性」についての抑えがたい「恥辱」の意識であつたろう。さきに「狂人日記」や「随感録」その他に見てきた魯迅の「民族的恥辱感」は、すでに述べたように小説の中では民衆の直接的な生にわくづけられて作者の意識に見合った表現を獲得することはなかった。私の言う両者の分裂とは主としてそのことを指して言ったものであるが、『新青年』による運動の全体的な展開が分解して孤立を強いられるに及んで、魯迅の民族的な恥意識はいつそうつよまり、つよまることによってその恥辱感のよってきたる根源としての「精神勝利法」を探りあて、ようやくに小説的表現のとは口を見つけて一つの影像に結ばれたのがこの阿Qである。阿Qを描くことによって反省を促そうとする魯迅の意図は、早く茅盾らによって「阿Q相」⁽²¹⁾として受けとめられたが、抗日戦争期に入ると、いっそうの危機感をもって中国の青年たちの脳裡に日常的によりみがえり、かれらの前進を促す批判の鞭となった。若き日の張天翼の文章はこのことを有力に語っている。

「他人がこの作品を読むとき、かれ自身の心を映し見ることになるかどうか、また映し見てどんな気持がするか、私は知らない。私自身はたいへん苦しくなつて、泣きも笑いもなくなる。私の内部に存在する阿Q精神の原子がいとわしくなる。それは魚の目のようにしつこく離れない。私はそれを削り取ろうとする。それは当然私自身の内部衝突をひきおこし、痛みに苦しまねばならぬことになる。

だが——いつその痛みに耐えよう。

とにかく、阿Qになつてはいけない！

そうでなければ、不安の中からしだいに脱け出し、阿Qを笑う笑いの中に苦澁と羞恥をまじえず声を出して一笑するようになることはできないのだ。

そこで私は考える。みんなこうなのだろう。われわれみんながもし声をあげて阿Qを笑い内心に少しも恥じることはないようになれば、そのときとそわれわれ自身の健康さが証明されるのだ、と。

そこで私は考える。このような笑いこそ——あの芸術家がこの典型を創造するときに熱い心で待望したものではなかったか、と」⁽²²⁾

張天翼の言っている「苦澁と羞恥」は、今日阿Qとともにわれわれの身近にある。われわれが屈辱とともにあるかぎり、そしてわれわれの状況がそれに対する即座の反撃を許さないとき、何らかの形でその痛恨をなだめておかななくてはならぬことは多い。それはよりよく生きるための路である。だがそのときわれわれが阿Qとともに「精神勝利法」に陥らないという保証は、おそらく自己とのたたかいのほかにとこにもないのだ。「阿Q精神」はこのような意味で普遍的存在である。けれど単にこのことにとどまらず、魯迅における民族の恥辱感が阿Qという一ルンペン雇農の上にその影像を結んだことは、中国近代文学の嚆矢が一狂人の日記として放たれざるを得なかった事実とならんで、文学史上実にめざましいできごとであつた。

「阿Qには家がない。未荘の土地廟に泊まっていた。また定職もない。人様の家に日雇（原文「短工」）で雇われ、麦を刈れと言われれば麦を刈り、米を搗けと言われれば米を搗き、舟を漕げと言われれば舟を漕いだ」

「恥辱」的存在の形象について

「家」がないとは妻も子もないことである。村に時たま賭場が立ち、自分はすってんになったくせに他人の勝負にははらしながらすっかり夜更かししてしまった翌日でも、阿Qははれぼったい眼で仕事に出かけねばならなかった。遊び人（原文「遊手」）流の「狡猾」を具えてはいるが、ゴロツキ（同「流氓」）やチンピラ（同「痞三」）ではないとは魯迅の強調するところであるが（『『戯』週刊編者に寄する手紙』、一九三四年）、木刻『阿Q正伝』（一九三五年、未名木刻社刊）の作者劉岷にあてた手紙の中では次のように言っている。

「阿Qの影像是、私の頭の中ではもう少しゴロツキ気の少ないものです。私たちのところではこれほどの面相（原文「兇相」）があれば、ただ飯を食っていくことができ、よそ様に雇われて仕事をしなくともやっていけます」

（『魯迅書信集』下、附録）

阿Qはこうした最下層の農民である。周知のように、中国革命はプロレタリアートの指導にもとづくとはいえず、事実上雇農・貧農・下層中農を主体とする農民革命であった。したがって新中国の批評家たちの論議が、「阿Qは農民であるのに、阿Q精神は否定的で恥ずべき現象である」ことの「困難と矛盾」をどう考えるかに多く集中せざるを得なかったのは、ごく自然なことであつたと思う。かれらの議論は農民である阿Qの運命をわがこととする切実さにもとづいていて、われわれの傾聴すべき点はもとよりきわめて多いが、「典型論」のわく内での討論がはたして万能であり得るか疑問である。いま中国での論議に立ち入ることは見送らざるを得ないが、ただいずれにせよ、この作品の主人公に雇農たる阿Qが選ばれたことの意義は絶対である。この作品の数か月後に書かれた「端午の節句」（一九二二年六月）が、同じく「精神勝利法」の一種に属する「似たり寄ったり説」（原文「差不多説」）に依拠して現実とのたかいた回避する知識人（官吏で教師を兼ねる）方玄綽の、己れにふりかかる火の粉に追いつめられて進退きわまる道行き

を描写しながら、その骨格も風貌もまったく異なった作品となってしまうことを思えば、このことのもつ意味の大きさはほぼ明らかである。阿Qが、単なる「精神勝利法」の傀儡としてでなく、雇農たる阿Qの生を阿Q流のたまじめさで生きぬいたこと、「阿Q正伝」の生命も、読むものの感動もかかってこの点にある。

魯迅の民族的な恥辱感が、この年一方で「生きて降るも死んで降らず」のような雑文をのこしながら、数月後に最下層の農民の上に影像を結ぶ事實は、第二章で述べた魯迅の「人民性」ということを抜きにしては考えることができない。フアジェーフは「ゴーゴリの『外套』の主人公が小官吏であるのに、『阿Q正伝』の主人公が小雇農である」ということは、魯迅の優位を示すに足り、魯迅の人民性を明らかにしている⁽²⁴⁾と言う。要するにそれは、光榮であれ恥辱であれ、民衆の認識が民族の認識の中心に据えられるほかのありようがないすぐれた民族的作家の姿をわれわれに語っている（光榮については「小さなできごと」を見よ）。だがそれだけでなく、同時にこの事實は「精神勝利法」そのものの本質と深くつながっているのである。

「狂人日記」が「吃人」の元兇として告発した「礼教」は、危害や搾取を合理化する恥ずべき詐偽心として、本来、強者、圧迫者、支配者の論理であった。「狂人」の叫びは、この論理にとりかこまれ、束縛されている人間の苦痛と恥辱の中から発せられた自覚の声である。阿Qも、「男女の大防」を守ること「敵」なる点において、異端や造反を憎悪すること「深刻」なる点において、この「礼教」のとりこたること人後に落ちるものではない。それに対して「精神勝利法」とは何か、と問題を立てるならば、われわれはそれが、屈辱や苦痛を精神的な処理によって勝利や歓喜に転ずる恥ずべき自己偽瞞として、本来的に弱者、被圧迫者、被支配者の論理であることに気づくであろう。「狂人日記」の恥辱感が「四千年の食人の履歴を持つおれ」の発見に発しているのに対し、「阿Q正伝」の出発にある恥

「恥辱」的存在の形象について

辱感^ニは鄒容の言う「一大奴隸史」の認識にもとづいている。

「中国人には歴史がない。中国のいわゆる二十四朝の歴史は、実際は一部の夫奴隸史である。漢末から今日にいたるまで、おおよそ一千七百余年の間、中国全土が異民族の奴隸とされたのは七百五十九年間である。黃帝の子孫がその直系の同胞を率^ミり、その世襲の土地を挙げて、やむなく他民族の奴隸とされたことが、なんとしればよかったとは」

阿Qは、ひげの王から受けた屈辱（この事件はいかにも「日清戦争」の敗北に似ている）もにせ、毛唐に棍棒でたたかれた屈辱（「髪の話」の挿話を逆転してここに用いた魯迅の筆は実にしぶとい）も、静修庵の童尼の頬をつねり、酒店の客の喝采を浴びることですっかり忘れてしまう。いくど屈辱を受けても自己偽瞞とより弱い者への転嫁によって阿Qは「永遠に得意である」。「これはあるいは中国の精神文明の世界に冠たる一証拠かも知れない」と魯迅は書く。漢民族の「一大奴隸史」を支え、維持している元兇がこの「精神勝利法」にあること、それがまず「阿Q正伝」の発見であった。前稿で述べたようにへんげ事件における魯迅の恥辱感が、異民族に首を切られる同胞の屈辱を、わが屈辱と感ずることのできない人々の恥辱的な状態について発したものとすれば、「精神勝利法」の発見における恥辱感は、同胞の屈辱や苦痛はおろか自己のそれさえ、屈辱や苦痛と感ずようとしな^い同胞の恥辱の状態について発せられたものである。

だが、童尼の頬をつねって喝采を浴び、得意の絶頂にあった阿Qの没落は時を経ずしてやってきた。童尼の頬から阿Qの指にのりうつった「すべすべ」のためにかねは「ふわりふわり」（原文「飄飄然」）となり、「女、女……」とその「放心」を収めることができない。その阿Qが米搗きに雇われた趙家で女中の呉媽に求愛して大騒ぎを起こし、それ以来村中の仕事を干しあげられ、空腹に耐えかねてついに村を出る第四章「恋愛の悲劇」、第五章「生活問題」で

は、雇農たる阿Qの個性は遺憾なく發揮される。未莊ににらみをきかず趙家の威光とかれらの搾取と圧迫に裸でさらされる阿Qの姿を描く魯迅の筆は冴えて、もはや民族の敗北の歴史をつぎぬけて階級の受難に迫る勢を示すが、われわれは阿Qの受難の中からしだいに「精神勝利法」が、踏みにじられ、侮辱されることのあまりに多かったものたちの「かりそめの生」「いつわりの回復」であることを知る。それゆえにそれが、屈辱と苦痛からの人間的回復として同じく本来的に、被圧迫者、被支配者の論理である「革命」と同じ基盤に生まれ、かつ鋭く真向から対立するものであることを知る。「精神勝利法」が恥辱であるのは、それが人間の屈辱や圧迫からの解放をその芽だちにおいて自ら摘みとり、そのことによって下から「吃人」の社会を支えるものだからだ。一篇の主人公が最下層の農民たる阿Qでなければならず、時代が「宣統三年九月十四日」前後でなければならなかった創造の機微を解くカギはおそらくこの辺にある。そして同時にここにおいて、ほかならぬ阿Qの「精神勝利法」はしだいにその効力を失いはじめ、「恥辱」的存在の形象を追究してきた作品世界は根本的な動揺をきたしてくる。作者は作品がつくりだしてきた振幅の大きさをそのままに、またもや民衆の「生への意志」に突きあたらざるを得なかったのである。

『かれは『食を求めて』通りを歩いていった。なじみの酒店を見、なじみの饅頭を見たが、いずこも通りすぎた。しばらくも立ち止まらなかつたばかりか、ほしいとも思わなかつた。かれの求めているのはこういうものではなかつた。かれの求めているのがどんなものか、かれ自身も知らなかつた』

阿Qが求めていたのはかれが手に入れた古大根三本などでもなかつた。もっともつちがった何かであつた。しかし「革命」はかれをうっとりさせるまえに、「食を求めて」出かけた城内で一つの「饗宴」にかれを立ち会わせた。

『おまえら首切りを見たことがあるか』と阿Qが言った。『おもしろいぞ。革命党を殺すんだぞ。ああ、おもし

「恥辱」的存在の形象について

ろいのなんのって……』かれはしきりに首をふってつばを真向かいの趙司晨の顔にとばした。聞き手はシーンとなった。だが阿Qはぐると見まわすと、突然右手を高く上げ、首を伸ばして聴き入っていたひげの王のうなじ目がけて振りおろした。

『バサリ!』

ひげの王はビクッとして跳びあがり、同時にさっと首をちぢめた。聞き手たちはまたゾツとなりかつよろこんだ」

このどす黒い情景は、「藤野先生」で「見物人たちはきままつて酒に酔ったように喝采した」と書いたあのへ幻燈事件の増幅された構図であり、「暴君の臣民」のそれでもある。阿Qの「大団円」も結局この構図をめざしてすすまざるを得ない事情は、これが牢固として魯迅の民族像の中心にうずくまりつづけていたということを示しているが、尼の頬をつねって得意になる阿Qを見てきたわれわれは、魯迅がこの恐怖を見据え、再現するその手つきをありありと見ることが出来る。「随感録」に言う「暴君の臣民」の影像が持っていた不分明さはここにはない。それはこの場面ではつきりと、謀反を憎むこと「深刻」な「礼教」と、他人の不幸を「賞玩」することによってしか屈辱を晴らし得ない「精神勝利法」とが一体となって「吃人」を支え、中国人の人間的回復に「革命」の芽を食いつくしている構図としてとらえられたのである。

「革命」は、阿Qの「中興」がまたも「末路」を迎えたあとの宣統三年九月十四日、「百里に名のとどろく拳人旦那」や未荘の「有象無象」が恐れ、あわてる光景から阿Qに近づいてきた。

『「革命もわるいものではないわい」と阿Qは思った。『あゝ畜生どもを革命してやるんだ。あの憎い、いまいま

しい奴らめ……おれだって革命党に降参（原文「投降」）してやる』

阿Qはまたもや「ふわりふわり」となる。言うまでもなくこの「ふわりふわり」は、阿Qが先に「女、女……」とつぶやきはじめたのと同じ切実さで「革命」のとりことなつたことを示している。魯迅の筆は、阿Qの「革命」があくまでも「阿Q式」の「革命」であることをしっかりと押えつつ、この切実さを実にみごとに描いていく。「未荘の有象無象が『阿Q、お助け!』と叫ぶだろう。だれが聴いてやるものか」殺さるべき筆頭に趙旦那をあげたのはともかく小型阿Qである小Dまでつらねる。それから秀才、にせ毛唐……。『何人か残してやるか? ひげの王は残してやってもいいのだが、えいやっちまえ』分取品の山。女たち……。この八つ当りの空想は相変らず滑稽でみじめで、醜悪でさえある。だがすっかり「革命」のとりことなつた阿Qの切実さをわれわれは笑うことができない。

『謀反? おもしろい……白い冑白い鎧の革命党がぞくぞくやって来る。てんでに青竜刀、銅の鞭、爆弾、鉄砲、三股の刀、薙刀なまたを持って、この土地廟の前を通りながら声をかけるんだ。『阿Q! おい行くぞ!』』そこでおれもいっしょに行く。……』

だが一時未荘を震撼した「革命」も、伝聞によれば城内にほとんど変更を与えなかった。未荘における趙家の威光は、秀才が白拳人のよしみで自由党に入つたことでむしろつよくなり、同時に「黎元洪の友人」（原文は「洪哥」。『全集』は黎元洪かと注する）で「洋話」を解する「革命党」たるにせ毛唐が抬頭してくる。にせ毛唐を真似て弁髪を巻きあげるものたちも増えた。阿Qは、革命党への「降参」を言明し、そのため一時村全体を震わしたのであるが、いまや弁髪を巻きあげても一向に変わりばえがしない。「革命」をするには革命党とよしみを通じることが必要だということに阿Qは気づくが、かれの知っている革命党は二人しかいない。その一人はとくにバサリとやられた。のこるはにせ

『恥辱』的存在の形象について

毛唐だけだ。だがにせ毛唐はたずねて来た阿Qに「革命」を許してくれず、棍棒で追っばらった。もはや「白晝白鎧」の革命党が阿Qを呼びにくる望みは絶たれ、阿Qの「抱負、志向、希望、前途の一切がバッテンで消されてしまった」。やがて阿Qはどさくさにまぎれて頻発する略奪事件の犯人にしたてあげられ、機関銃までかつぎ出した大がかりな捕物陣に寝ぼけ眼でつかまえられ、城内に引たてられる。取調べの広間での「革命党」の官吏と阿Qとの問答は、「辛亥革命」の「挫折」の意味を的確に一場に凝縮し、第二章でとりあげた「葉」の茶館の場と双璧をなす。

「広間に行く」と、奥の方の正面にてかてかに頭を刺った老人が腰をかけていた。阿Qは坊さんかと思った。だが見ると手前に兵隊が一行、両側には長衣の人物が十数人立っている。老人のように頭をてかてかに刺ったのもおり、にせ毛唐のように一尺ほどの長髪を肩まで垂らしているものもある。いずれも恐しい形相でかれを睨みつけたので、阿Qは、この老人はきつと偉いお方なのだろうと思った。すると膝の関節が自然と弛んで、跪いてしまった。

『立つて話せ！ 跪くな！』長衣の人物たちがそろって大声で叫んだ。

阿Qは言われている意味は分るような気がしたけれども、どうしても立っていることができない感じがして、身体が自由にならずひとりでにしゃがみこんでいき、そのままとうとう跪いてしまった。

『奴隷根性！……』長衣の人物がまた軽蔑するように言ったが、もう立てとは言わなかった。

『正直に白状したまえ。痛い目に会わないようにな。私は何もかもとくに知っているのだ。白状したら釈放してやれるのだが』坊主頭の老人が阿Qの顔をしかと見ながら、静かなはっきりした声で言った。

『白状したまえ！』長衣の人物も大声で言った。

『おらぁもともと……おいらから……』阿Qはしばらくわけもわからぬまま考えて、ようやくぼつりぼつりと

これだけ言った（阿Qの言の原文は「我本来要……来投……」。つまり「要求投、降、革命党」と言おうとした）。

『それならば、なぜやって来なかったのか』 老人がおだやかにたずねた（老人は阿Qの言を「要求投、首」ととった）。

『にせ毛唐が許してくれなかったんで』

『でたらめを言うな！ いまごろ言ってももう遅い。おまえの仲間はいまどこにいるのだ』

『何のことで……』

『あの晩趙家に押しこんだ一味のことだが』

『あいつらおいらを呼びに来なかった。自分たちで運んで行っちまいがった』

阿Qは口に出すなり腹が立ってきた。

『仲間はどこに行ったのか。言えば許してやるう』 老人はいっそうおだやかに言った。

『おら知らねえ……あいつらおいらを呼びに来なかった……』

しかし老人が目くばせをすると、阿Qはまた軍の中に連れもどされた

問答は「革命党」が迎えに来なかったこと、「革命」をにせ毛唐に禁じられたことの口惜しさを語る阿Qと、強盗一味の所在を訊き出そうとする「革命党」官吏との間で、決定的にすれちがっている。このすれちがいは、「薬」における老栓らの意志と夏瑜の意志とのすれちがいに比していっそう悲劇的だ（実際にはどちらがより悲劇的であるか微妙な問題であるが、ここでは苦痛の強度についてそれを言うことにする）。阿Qがとにかく「革命」にうっとりし、「弁髪を巻きあげた」のにもかかわらずかれの「魂」が求めていた「革命党」（つまりこれは夏瑜たちのことだ）は早く「バサリ」とやられ、新しい時代に君臨する「革命党」はすでに趙旦那の仲間であり、憎むべきにせ毛唐たちだったからである。阿Q

「恥辱」の存在の形象について

は眠りから覚めかかって梯子にのぼり、その梯子の途中で突きおとされたのだ。香坂順一氏によれば、「辛亥革命直後は民主平等の表現として、裁判で尋問をうけると、立ったまま答えていいことにした」⁽²⁶⁾のだという。「立って話せ！ 跪くな！」はそのような思想にもとづいている。

『奴隷根性！……』長衣の人物がまた軽蔑するように言ったが、もう、立てとは言わなかった」（傍点は引用者）

われわれはこの語に民衆の立ちあがり拒否した「革命」の姿を端的に見る。そして「奴隷根性！」の語がいかに空疎に響くことか。郷容のことばを思い出してみよう。「国民といい、奴隷という。国民は強く、奴隷は亡び、国民は独立し、奴隷は服従する」、「革命せんには先ず奴隷の根性を去るべし」（『革命軍』⁽²⁵⁾）とかれは言いのこし西平に死んだ。それにもかかわらず、多くの血を流してようやくにたたかいたとられた「共和国」は、その成立とともに早くも阿Qを、つまり中国の民衆を「国民」の外に置いたのである。魯迅の筆は実に的確にそのことを語っている。

「大団円」への下り坂を走らせながらも、「なに人間生まれたからにやときには首切りにあうこともあるさ」、「……ときには引き廻しにあうこともあるさ」と、魯迅は執拗に「精神勝利法」を描いて阿Qを放さない。けれどもその中でこの「無恥」な阿Qが二度にわたって「羞恥」に襲われるのをわれわれは見る。白州に引き出されて署名のため筆を握らされたとき、阿Qは「文字を識らぬこと」が恥ずかしかった。かわりに書いた「マルが西瓜の種に化したこと」が恥ずかしかった。阿Qは「おれの孫ならまんまるいマルが書けるさ」と思って恥ずかしさを振り切った。引き廻しの見物に集まった群衆の中に呉媽の姿を見つけたとき、かれははっとして唄一つ唱えない自分を恥じた。そして阿Qの口から出たのは、死刑囚の決まり文句「二十年たったら生まれかわって男一匹……」という男意気であった。だがこれらはもはや「精神勝利法」なのか「翻身」への祈りなのか区別がつかない。ともかく阿Qが「二十年たつた

ら」の句を口に出したとき、群衆の中から『いゝぞ！』という狼の吠えるような声があがった。喝采の声の中で阿Qは呉媽をさがしたが、兵隊の鉄砲に見とれているのが目にはいっただけだった。そこでもう一度群衆に目を向けた。

「この刹那、かれの思考がまた旋風のように脳裡を走った。四年前、山の麓で一匹の餓えた狼に出会ったことがあった。狼はかれの肉を食おうとして、近くもならず遠くもならずどこまでもかれのあとをつけてきた。そのときかれは恐しくてへなへなになりそうであったが、おりよく手にしていたなを頼りに氣をとりなおし、やっと未荘までたどりついたのだった。だがあの狼の目はいつまでもおぼえている。残忍なそれでいてビクビクした目、それが二つの鬼火のように光を放ち、遠くの方からかれの皮肉に突き刺さるかと思われた。ところがこんどまたいままで見たこともないもっと恐しい目をかれは見た。鈍いそれでいて鋭利な目。それがすでにかれのことを噛みくだいたばかりか、さらに皮肉以外のものまで噛みくだこうとして、近づきもせず遠くもならずどこまでもかれのあとをつけてくる。

これらの目がずっと重なってひとつになったかと思うと、もうかれの魂に噛みついていた。

『助けてくれ……』

だが声にはならなかった。かれはとくに目がくらみ、耳がガンとして、全身がこなごなに砕けとび散るようなのを感じた」

阿Qが「四年前」に見た狼の目、その「残忍なそれでいてビクビクした」（原文「又凶又怯」）光は、四年前に魯迅が「狂人日記」に表現した「吃人」の目である。「四年後」阿Qはもっと恐しい目の光を見た。「鈍いそれでいて鋭利な目」（原文「又鈍又鋒利」）、阿Qはこの目の光に「吃人」と「奴隸」との合体を見てとったのである。こうして魯迅が見

「恥辱」的存在の形象について

出したのは暗黒の中の孤独の深淵である。ばらばらに隔てられ、心と心の通じあわぬようにされてしまった人間たちの、そしてそれ故に「吃人」を脱け出すことのできない人間たちの深い孤独をこの目は語っている。阿Qはこの暗黒の限々のどこにでも存在する。そのどこにでもいる阿Qが、その目の光の恐ろしさと、その中に生きる人間の絶対的な孤独の苦痛に目覚めて、(つまり「魂に噛みつかれて」、生命の叫びをあげたのが、「助けてくれ……」という阿Qの「声」であった。魯迅はこの「声」に「国民の魂」を見たのである。けれども魯迅はもう一句つけ加えなければ気がすまなかった。「だが声にはならなかった」と。われわれはこの一句に、「聖賢の教えが築いた高い塀」と「恐るべき難解な文字」とによって考えることすらできなくされている「沈黙の国民」⁽²⁷⁾に寄せる魯迅の「愛」の深さと、その「魂」を力をこめて模索する「精神」の高さを見る。そして「文学者」魯迅自身の孤独をも見るのである。

(五)

四年前「虫けら」から「人間」への「進化」の道を示しながらひたむきに「吃人」をやめよと説いた「狂人」の論理において、「恥辱」「羞恥」は、その「進化」の内実である人間のたえざる自己超克の契機(モメント)として重要な位置を占めている。「狂人」の論理はそのまま「五四」期魯迅の論理であったが、これがニーチェに似ることは、魯迅自身の認めることでもある。そうであった以上魯迅における「恥辱」の帰趨がニーチェのそれに似ることがあっても何ら不思議ではないということになるであらう。

ツァラトゥストラが「蛇の死」という名の谷で出会った「最も醜い人間」、それが阿Qの登場に似ている。その人

間のようなが、人間とは言えない、「何とも名状しがたい者」は、かれの「ある黒いものの思い出」が眼前に凝結し、うずくまったものであったが、そのものを見たツァラトゥストラははげしい「羞恥」に襲われ、目をそむけ、立ち去ろうとした。だがそのものが「わたしの謎を解いてみよ！」と人間の語を發したとき、ツァラトゥストラは「同情」の斧でうち倒され、醜く、苦しげに喘ぎ、隠された羞恥にみちた人間の実存の發見へ導かれていった。⁽²⁸⁾

魯迅の心中にわたかまる「幽霊」はおそらくあの「暴君の臣民」のイメージであって、それはいくとも魯迅に目をそむけさせ、かれを現場から引き離そうとしたにちがいない。それは連帯すべき他者の苦痛を「賞玩」し、残酷を「娛樂」とする醜惡にみちたものであった。だが魯迅をしてそれを直視させ、踏みとどまらせたのはそのものを見たときに發したかれの感情が「嘔吐」でなく「羞恥」(恥辱)であつたからである。⁽²⁹⁾ ツァラトゥストラを襲つた「同情」——それは魯迅にあつてはその黒いものが阿Qという人間になつて魯迅において生きる、ことである。それはとりもなおさず魯迅が阿Qにおいて生きることを意味する。その生の中で魯迅は「苦しげに喘ぐ、隠された羞恥にみちた」人間を見たのである。ここまでわれわれは両者の一致をたどることができる。けれども、それはここまでである。

『ツァラトゥストラ』の展開はのちにこの「最も醜い人間」が(かれさえもが)、「これが——人生というものであつたのか?」、「よし! それならもう一度!」と「死」に向かつて叫ぶ声を合図に、「嘆きだろうと、苦悩だろうと、憎惡だろうと、恥辱だろうと、畸型だろうと」、一切を渴求する「よろこび」の哲学——「永遠回帰」めざして「あまりにも渺茫」(「隨感錄四十一」、一九一九年)になつていく。けれども、「暴君治下」の「臣民」である阿Qのあくまで現実的な個別性への執着は、魯迅の「羞恥」を固く「民族」につなぎとめ、一切の「永遠回帰」を受けて立つ「勇猛」な虚無哲学にふけることを決して許さなかつた。魯迅の体内を死に向かつて歩きぬいた阿Qの生は、「生け贄」の「あ

「恥辱」的存在の形象について

あ」という声に中国民衆の深い孤独と苦痛とをたたえさせ、「幸いに免れたもの」たちがその死を「慰安」として発する「よるこび」の声の悲劇的本質（「革命」と同根に発し、それと決定的に対立する「精神勝利法」）をめぐりに探りあてたのである。「二十年たったら生れかわって男一匹……」の「男意氣」は、「浜の真砂は尽くるとも世に盗人の種は尽くまじ」とつづく「循環」の宣言とはならなかった。歴史はこのあとくりかえし阿Qの死を再現したけれども、「循環」を断ち、阿Qの「翻身」を民族のものとしようとする深い願望として、それは生きつづけたのである。そしてそれだけにとどまらず魯迅の筆は、民衆の不幸の真の元兇としての階級支配と一つの「革命」の死とその死を演出する新しい勢力（にせ毛唐）の抬頭とをありありと物語ってみせたのである。⁽³⁰⁾

だがそのとき戦陣はすでに解体し、魯迅は孤独であった。その後のかれの文学はしばらく、民衆の孤独が暗闇から発する視線に身をさらしながら、それをどうすることもできない知識人の孤独を映してつづけられる。そのとば口で、「人間」の模範・兆候に照らし出される「羞恥」の意識は、民衆の不幸に向きあい己れを問いつづける姿勢に発するある意識（それは「対得起」「対不起」の語で表現されることが多いのだが）に音も立てずに位置を譲ったのであるが、そのことは次稿に入って考えてみたい。

注

(1) 文中のLは『新青年』六卷六号（一九一九年十一月）誌上では「魯迅」となっている。署名は唐俟である。

(2) 文中の「昆侖山」「弱水」はともに伝説上のものとしたがいいのではないかと思う。「弱水」は鳥の毛すら浮かない川で、魯迅は「中国地質略論」（一九〇三年）で「このような有

様では、たとえ弱水に四方を守られて孤立し、鎖国していようとも、やがては自然淘汰されて……ついには無生物にまでなりおわるであろう」（伊藤虎丸氏訳、『中国現代文学選集』二「魯迅集」、一九六三年、平凡社刊）と述べる。「桑間濮上」、桑間は古代衛国の地名、濮水のほとり（濮上）にあるのでこり言う。ここで嬋歌に似た行事が行われたことから古くより

「桑濮」によって淫靡な音楽のことを言う。

- (3) 木山英雄「莊周韓非の毒」(『一橋論叢』六十九卷四号、一九七三年)。

- (4) 木山英雄氏は『野草』的形成の論理ならびに方法について——魯迅の詩と「哲学」の時代——(『東洋文化研究所紀要』三十、一九六三年)の中で、「呐喊」期魯迅を規定するものを、「完全に自己の中にあらかじめ完全に自己を覆っている」と確信された暗黒の実在感」と「その暗黒の側にすすんで自己を局限しつつ仮定の未来に対して一切の責任を荷おうとする全面的否定の意志」の両者であるとし、前者を後者へとつなぐ契機を「絶望の認識そのものを努力の発条に転じる、逼迫した精神の飛躍力」に見ている。この小論は一々明記できないほど木山論文に教えられている点が多いが、この「精神の飛躍力」にかえて「恥辱」(「羞恥」)の意識を導入されるほうが少くとも私の言う「五四」期魯迅(一九一八—二〇年)の理解には有効であると思う。この論文の前提となった作業の一つである同氏の『阿Q正伝』について(『東大文学会』会報「十二号、一九五七年」は、「狂人日記」と「阿Q正伝」をもつばら分析して同じくたいへん示唆に富む論稿であるが、そこでは魯迅における「恥辱の自覚」が重視されている。後出の「阿Q正伝」の解釈について、木山氏のこの論稿に多く学んだ。

北大文学部紀要

- (5) 武田氏は中国の場合について、「阿Q的生存」状態についての「限らない屈辱」(小論の用語では「恥辱」)を指摘するが、文学者の「うしろめたさ」については次のように述べる。

「彼等のうしろめたさは、ただ、非近代的な中国が、様々な形式と内容を持つ近代の諸国家群にとりかこまれ、動きのたれぬ現状にある、それを放置しておくか否か、その一事にかかっていた。その現状を打開できない以上、あるいはそれを打開する運動に参加しない以上、彼等は文学者としての生命を、その瞬間から消失しなければならなかった」

- (6) この文章はアメリカ大使館員アーノルドの作成した三つ統計図(中国人口分布図、中米経済状況・生産力・工業状態比較図、世界に占めるアメリカの地位説明図)に対する感想を述べたものである。その中で胡適は、「帝国主義」の四文字で西洋文明を否定してはならないと「反帝」の空気を批判し、自分たちが他国に及ばない現状を認め、謙虚に他国に学ぶことを提唱して、アーノルド氏が「数面の鏡を提供して、われわれに自己の醜態を映し見る機会を与えてくれたことに感謝し、かれが卒直に意見を述べてくれ、われわれに羞恥心を生じせしめ、向上の決心を喚起してくれたことにいっそう感謝する」と述べる。

- (7) 魯迅は『ある青年の夢』訳者序二(一九一九年十月)で、同書翻訳の意図が「中国の旧思想の痼疾に治療を加える」こ

「恥辱」的存在の形象について

とにあることを明らかにしつつ、朝鮮問題についてふれ、「たとえば今日、日本の朝鮮併合について言及するときでも、得々と『朝鮮はもとわが属国なり』といった言い方をし、聞く方が恐くなる」と述べる。また日・中の「民族的恥辱感」について考える場合に、竹内実「使命感と屈辱感——文学における民族的戦争責任の視点——」（『日本人にとつての中国像』一九六六年、平凡社刊）が参考になる。

(8) 文中「人肉を売りし履歴を有する傾心探龍」は劉師培のこと。もと革命派であつたがのちに「変節」して両江總督端方に買収され、革命派の動静を探るスパイ（探偵）となる。のちに北京大学教授。袁世凱の帝制を企てる「籌安会」のメンバーとなる。この書信のころ『国粹叢編』の復刊を計画している。北京大学で『文心雕龍』を講じていたので、探偵とかけて「傾心探龍」と呼んだ。『ああ恥ずかしきかな』の原文は「猗歟羞哉」。「猗歟休哉」（ああよろこばしきかな）の言いかえ（羞・休は同音）であるが、あるいは朱爾邁「会葬唐烈婦記」（胡適「貞操問題」に引用する）に烈婦を表彰して言つた「猗歟盛矣」（ああ盛んなるかな）をもじつたものかも知れない（ただし魯迅書簡と「会葬唐烈婦記」の時間の前後に不明のところがある）。「袁朝の頃、冕帽を戴き……」は、袁世凱の統治時代に復活した孔子祭に教育部の役人として魯迅が参加していたことを言う。

(9) 「呐喊」自序」で、『新青年』への執筆をすすめる金心異（錢玄同）らについて、「私はかれの気持がわかった。かれらは『新青年』をやつていたが、そのころは賛成するものがないばかりか、反対するものもないようだった。かれらは寂寞を感じているのかも知れないと私は思った」と述べているのに比して興味深い。

(10) 拙稿『狂人日記』評師の一断面（覚え書）（『野草』十三号、一九七三年）で、不十分ながら「狂人日記」の形式的、手法的特徴について述べた。「個別性」の問題は木山英雄氏の前掲野草論に負う。

(11) 以上の作品の執筆時はすべて紀文「魯迅著訳系年目録」上（『中国現代文芸資料叢刊』第一輯、一九六二年、上海文芸出版社刊）による。なお「小さなできごと」の執筆時を近刊の新注釈本『呐喊』（一九七六年、人民文学出版社刊）は一九一九年十一月かとするが、上海師範大学中文系等編『和少年朋友談談学点魯迅雜文』（一九七七年、上海人民出版社刊）所収の年表は七月とする。

(12) 魯迅「中国新文学大系」小説二集序」（一九三五年）

(13) 原文「怕還会有人見情」。「見情」は諸橋轍次『大漢和辞典』に「事情を酌量する」とあり、わが国では「もつともだと思ふ」「無理もないと思う」といった意味に解すが、前掲新注釈本『呐喊』は「傾情、感激」（感謝する、ありがたがる）と注す

る。前後から考えてこちらをとる。なお英訳本『SELECTED STORIES OF LU HSUN』(一九二二年、外文出版社刊)も“people would probably be grateful to them”としてゐる。

(14) 木山英雄『阿Q正伝』について(前出)参照。

(15) 「風波」の冒頭で、魯迅は同主旨のことを述べる。「河を文人の酒船がとおりかかつて、文豪が(この光景を)見たら、大いに詩興を発して、『思いわずらうことなし、これこそ田家の楽しみだ!』と言うだろう」

(16) 溝口雄三「魯迅」(『中国文化叢書』五「文学史」、一九六八年、大修館刊)。魯迅における「辛亥革命」の「挫折」体験と『呐喊』の諸作品との関連を見る場合に溝口氏の論稿に教えられることが多い。

(17) 林紓の小説「荊生」、「妖夢」、蔡元培宛書簡などが守旧派の攻撃の代表的なものであるが、林紓らは軍閥徐樹錚を助かして『新青年』の武力鎮圧をはかろうとした、と周作人は述べる(『魯迅与清末文壇』、『魯迅的青年時代』、一九五七年、中国青年出版社刊)。当時の進歩的な諸出版物に対する軍閥政府の弾圧については、陰法魯「北洋軍閥対進歩刊物的摧殘」(後掲『中国現代出版史料』甲編所収)が参考になる。

(18) この間に『新青年』の同人間にやりとりされた書簡が六通保存されており、「關於新青年問題的幾封信」として張靜廬編

『中国現代出版史料』甲編(一九五四年、中華書局刊)に収める。またこの間のいきさつを含め『新青年』については、藤田正典「新青年10年の歩み」(汲古書院刊『新青年別巻』、一九七七年)参照。

(19) 「生きて降るも死んで降らず」、「名前」は、上海魯迅記念館資料組輯『魯迅全集』未印著作(前掲『中国現代文芸資料叢刊』第一輯)に収め、「無題」は『集外集拾遺』に収む。『熱風』に収める同名の文章とは別のものである。

(20) 同氏『魯迅——その文学と革命』(前出)

(21) 「説『呐喊』」(一九二三年、李何林編『魯迅論』、北新書局原刊、大安影印本所収)。

(22) 「論『阿Q正伝』」(路沙編『論“阿Q正伝”』一九四一年、桂林草原書店刊)。ただし引用は改名重印本の張天翼等『論阿Q』(一九四七年、草原書店刊、香港影印)によった。

(23) 何其芳「論阿Q」(『文学芸術の春天』、一九六四年、作家出版社刊)

(24) 法捷耶夫「論魯迅」(費德倫科等『論魯迅』、一九五三年、泥土社刊)

(25) 「革命軍」(小野信爾氏訳による。島田虔次・小野信爾編『辛亥革命の思想』、一九六八年、筑摩書房刊)

(26) 香坂順一注釈『阿Q正伝』(光生館、一九七一年刊)

(27) 「ロシア語訳『阿Q正伝』序」(一九二五年)

「恥辱」的存在の形象について

- (28) 『ツアラトウストラ』の引用は、氷上英廣訳『ツアラトウストラはこう言った』上・下（一九六七年、七〇年、岩波文庫）による。『ツアラトウストラ』における「嘔吐」、「羞恥」、「同情」、「勇猛」（後出）などの概念は、土井虎賀寿『羞恥・同情・運命』（一九三六年、岩波書店刊）に教えられるところが多い。ツアラトウストラは、それが人間の誇りを傷つける（つまり羞恥を知らないことによつて）がゆえに、キリスト教的な「隣人愛」としての「同情」を否定するのであるが、そのかれをも襲った「同情」とは、土井氏によれば、自己否定的な「同一心情」とされる。

- (29) 『魯迅研究』五号（一九五三年）に収める尾上兼英「『彷彿思想裏有鬼似的』から——阿Q正伝の理會について——」およびうさみなおき「『阿Q正伝』の理解について」が、この幽霊（「鬼」）について論じている。そこで尾上氏は「彷彿思想裏有鬼似的」の一句を魯迅の「胸のうちに、何か彼のひるむ心を許さぬものが現れた」と解して、「ひるむ心を許さぬもの」「鬼」を「先駆者たちの流した血」ととらえ、うさみ氏は同じく「しいたげられ、搾取され、ころされた『阿Q』たち」すなわち「人民大衆への愛情」ではないかと解釈している。

- (30) 魯迅は『ツアラトウストラ』およびゴーゴリの『狂人日記』と自作の『狂人日記』との関連に触れた文章で「だがあとか

ら出た（魯迅の）『狂人日記』は、（ゴーゴリの『狂人日記』や『ツアラトウストラ』とちがつて）家族制度と礼教の弊害の暴露を意図したものであり、（そのため逆に）ゴーゴリの憂憤より深く広いものとなり、またニーチェの超人ほどに渺茫としたものとはならなかった」（『中国新文学大系』小説二集序）、カッコ内は引用者）と述べているが、ニーチェに対する評語は「阿Q正伝」に対してもあてはまる。つまり「阿Q正伝」はあくまで民族の政治的社会、人間的關係に固執したものであるがゆえにニーチェの「最も醜い人間」ほどに「渺茫」たるものとならなかった、と。なお「小説二集序」文章の解釈については、前掲の拙稿『『狂人日記』評価の一中の断面（覚え書）』参照。

追記

本稿は「出発における『恥辱』（『羞恥』）の契機について」の続篇であり、三部作を構想する「民族的自己批評としての魯迅文学」の第二部にあたる。第三部の仮題は、『恥辱』からの回復」である。

前稿について先学・同学の諸氏が貴重なご批判をいただいた。本稿でできるだけそれらを生かしたいと考えたが、不備の点の多いことと思う。前稿に寄せられたご批判に感謝するとともに、本稿も一つの問題提起としてご検討いただければ幸いである。